

## 第3章 第22次調査（西病棟新営その他電気設備地点）

### 第1節 調査の概要

#### 1. 調査に至る経緯

蔵本キャンパスの東南部で、西病棟新営に係る電気設備工事が計画された。過去の調査成果にもとづくと、本地点において弥生時代前期を中心とする遺構・遺物が検出されることが予測されたため、発掘調査を実施することとした。

#### 2. 調査体制

調査主体	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・定森秀夫〔総合科学部・准教授〕）
調査員	中村豊（大学開放実践センター・助教）
調査補助員	板東美幸（施設マネジメント部・技術補佐員）
調査期間	2008年1月9日～2月14日
調査面積	約103㎡



図3-1 調査風景（東から）

### 第2節 調査の記録

#### 1. 縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の時期区分

本地点では、庄・蔵本遺跡においてこれまで資料が少なく不明瞭であった、縄文時代から弥生時代への移行期に位置づけられる遺構・遺物が検出された。報告にあたり、まず当該期の時期区分を整理しておく。中村豊の縄文時代晩期後葉（中村，2014）および弥生時代前期（中村，2000，2004）の土器編年を参照し、これらを表3-1に整理した。また、中村（2014）による瀬戸内・近畿の土器編年との併行関係および近藤玲（2017）による北部九州の土器編年との併行関係を付した。以下では、表3-1の時期区分に従って、遺構・遺物の時期について説明する。

なお、凸帯文IV期2<sup>註1)</sup>とI-1様式・古、凸帯文IV期3とI-1様式・新はそれぞれ併行するが、冗長さを避けるため、以降I-1様式・古、I-1様式・新、一括する場合はI-1様式と表記する。

表 3-1 徳島における縄文時代晩期から弥生時代前期の時期区分

時期区分	土器編年 (中村2014)	土器編年 (中村2000, 2004)	基準資料 (中村2014)	基準資料 (中村2000)	瀬戸内・近畿 との併行関係 (中村2014)	北部九州 との併行関係 (近藤2017)
縄文時代晩期後葉	凸帯文Ⅰ期		土井(SK1023), 光勝院寺院内		前池式・ 滋賀里Ⅳ	山ノ寺 ・夜白Ⅰ
	凸帯文Ⅱ期		薬師, 大柿		津島岡大13層 ・口酒井期	夜白Ⅱa
	凸帯文Ⅲ期				沢田式 ・船橋式	夜白Ⅱb ・板付Ⅰ
	凸帯文Ⅳ期1		名東(SX01), 宮ノ本		長原式	
縄文時代晩期末 ／弥生時代前期初頭	凸帯文Ⅳ期2 (遠賀川式土器共伴共 伴期1)	I-1様式・古	三谷(SX01, SX02-1, SX02-2, SX03)			板付Ⅱa
	凸帯文Ⅳ期3 (遠賀川式土器共伴共 伴期2)	I-1様式・新	三谷(第3層), 南蔵本(新 SB4001, 新SK4013, 新SP4004)	庄・蔵本6次(配石墓2), 同9次(旧 河道), 同10次(溝1), 同15次 (SK458, SD427)		
弥生時代前期中葉		I-2様式		庄・蔵本15次(SK022, SK403, SK0006, SK0007, SD16, SD17, SI01)		板付Ⅱb～Ⅱc
弥生時代前期末 ／中期初頭		I-3様式		庄・蔵本9次(土壘1), 同10次(土 壘1, 土壘2, 土壘3), 同15次 (SD13, SK0029)		
		I-4様式		庄・蔵本15次(SK35, SD107)		

また、凸帯文Ⅰ期～同Ⅳ期1を縄文時代晩期後葉、I-1様式を縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭、I-2様式を弥生時代前期中葉、I-3・4様式を弥生時代前期末／中期初頭とよぶものとする。

## 2. 基本層序

調査区東壁 A-A' と南壁 B-B' の土層断面図 (図 3-2) をもとに、基本層序について説明する。周辺の調査地点では、下記 1～13 層より上層に上から、表土 (明治時代前期の陸軍歩兵第 43 連隊創設に伴う造成土および戦後の大学病院整備に伴う整地層)、青灰色粘土層 (近代の水田層)、緑灰色シルト層 (中世～近世の水田層)、黒褐色シルト層 (弥生時代前期末／中期初頭～中世の土壌化層) の堆積が確認される。しかし、本地点では近年の攪乱が著しく、これらはほとんど残っていなかった。そのため、ここでは黒褐色シルト層より下の 1～13 層について説明することとする。なお、黒褐色シルト層は既往調査の「黒褐色土層」(中村, 2000) に相当する。

- 1層 灰黄褐色(10YR5/2)のシルト質細砂である。マンガンを含む。調査区東隅に限り確認される。
- 2層 灰黄褐色(10YR4/2)のシルト質細砂である。マンガンを含む。
- 3層 にぶい黄褐色(10YR4/3)のシルト質細砂である。マンガンを含む。
- 4層 灰黄褐色(10YR4/2)のシルト質細砂である。マンガンを含む。
- 5層 灰黄色(2.5Y6/2)のシルト質極細砂である。マンガンを含む。
- 6層 灰オリーブ色(5Y6/2)の粘質シルトである。マンガンと鉄分を含む。
- 7層 暗オリーブ灰色(5GY4/1)の粘土である。鉄分を含む。
- 8層 暗緑灰色(7.5GY3/1)の粘土である。

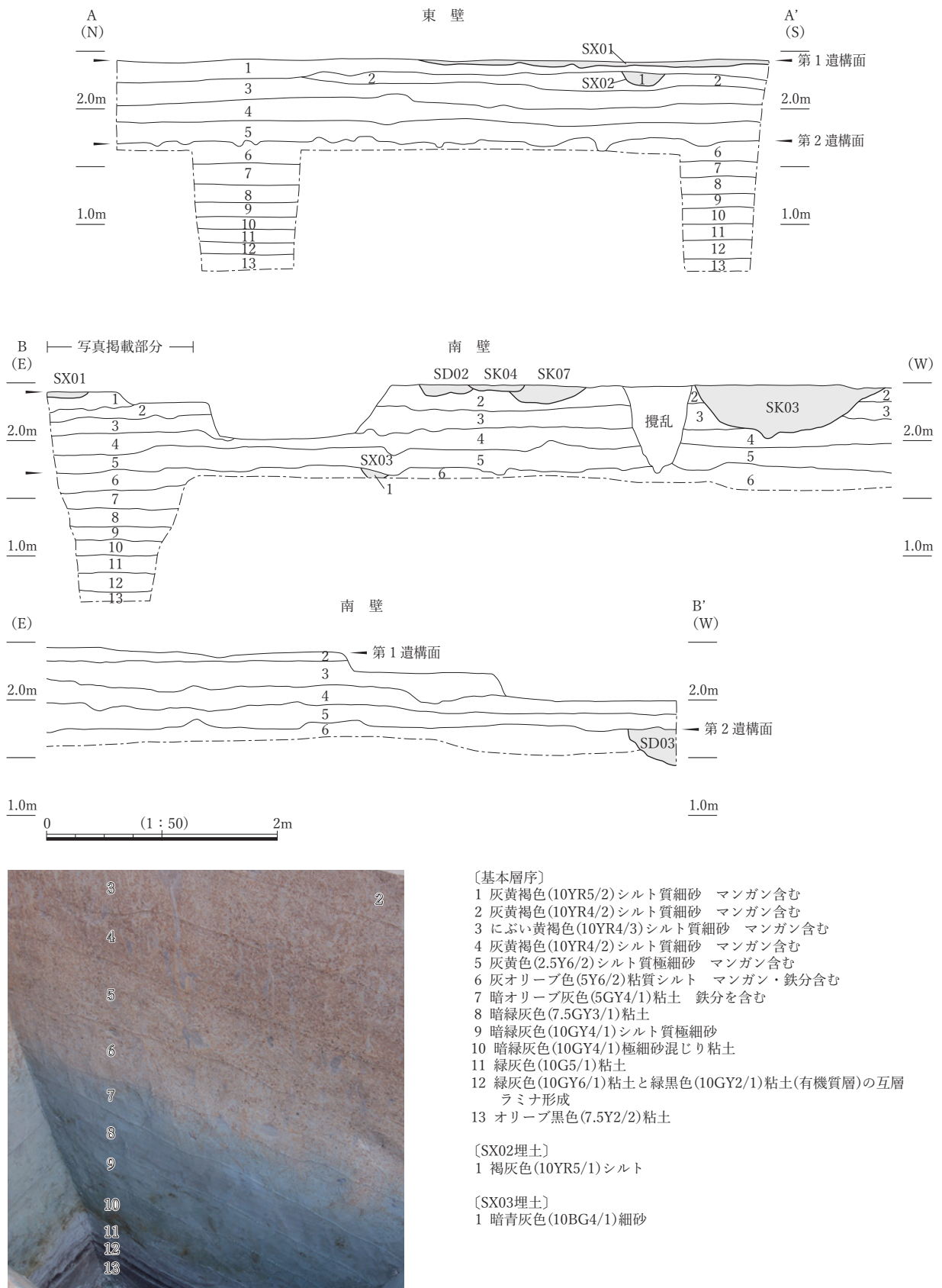


図 3-2 東壁・南壁の土層断面

- 9層 暗緑灰色（10GY4/1）のシルト質極細砂である。
- 10層 暗緑灰色（10GY4/1）の極細砂混じり粘土である。
- 11層 緑灰色（10G5/1）の粘土である。
- 12層 緑灰色（10GY6/1）の粘土と緑黒色（10GY2/1）の粘土（有機質層）が互層になる。ラミナが形成される。
- 13層 オリーブ黒色（7.5Y2/2）の粘土である。

以下に、調査者である中村（2010）の見解を参照しつつ、各層の時間的位置づけと形成要因について説明する。1～5層は洪水起源砂層と推定され、一括する場合は黄褐色シルト層とよぶ。本層は既往調査の「黄褐色細砂層」（中村，2000）に相当する。他地点の黄褐色細砂層は弥生時代前期中葉～前期末／中期初頭（I-2～4様式）の洪水起源砂層と考えられ、その上面からは弥生時代前期末／中期初頭（I-3・4様式）～中世の遺構が検出される。一方、本地点では2層上面から縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）のSK03が検出されている。こういった点を考慮すると、洪水起源砂層と考えられる黄褐色シルト層のうち、少なくとも2層以下は、縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭頃には他地点より早く微高地化していたと推定される（中村，2000）。

6層は土壌化が進行しており、微高地形成直前の旧地表面であったと考えられる。既往調査の「暗褐色粘質土層」に相当し、縄文時代晩期後葉頃に形成されたと推定される（中村，2000）。なお、本地点では同層からの出土遺物は認められない。10層以下はグライ化した粘土層が堆積する。なかでも12層は本遺跡一帯で確認され、縄文時代後期末～晩期初頭頃に形成されたと推定される（中村，2010）。

1層上面もしくは2層上面を第1遺構面、6層上面を第2遺構面とし、調査を実施した。なお、第1遺構面から第2遺構面への掘り下げる時に検出された遺構、つまり1層中または2層中～5層中で検出された遺構を第1.5遺構面の遺構とした。

### 3. 第2遺構面の遺構と遺物

#### SD03（図3-3・5・6，図版4）

調査区南西隅の6層上面で検出された。全形は不明であるが、南北にのびる溝と推定される。残存部の長さ2.1m、幅0.4mである。断面は碗形とみられ、深さ0.3mである。埋土は3層認められる。シルト質粘土～シルト質極細砂で、土色は暗オリーブ灰色・オリーブ灰色・灰オリーブ色である。これは後述する第1・1.5面で検出された遺構の埋土とは異なる。

[出土遺物] 1は口縁部で、器種は不明である。小片のため時期を限定することは難しいが、形態や胎土からみて、弥生時代前期（I-1～4様式）の所産である可能性が高い。

[時期] 6層は縄文時代晩期後葉頃に形成された土壌化層で、その上に堆積する1～5層は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）頃の洪水起源砂層と推定される。つまり、6層上面に形成された本遺構は、縄文時代晩期後葉～I-1様式のある時点で形成された可能性が高いといえる。出土土器が混入したものではなく遺構に伴うものであれば、土器はI-1様式の所産である可能性が高



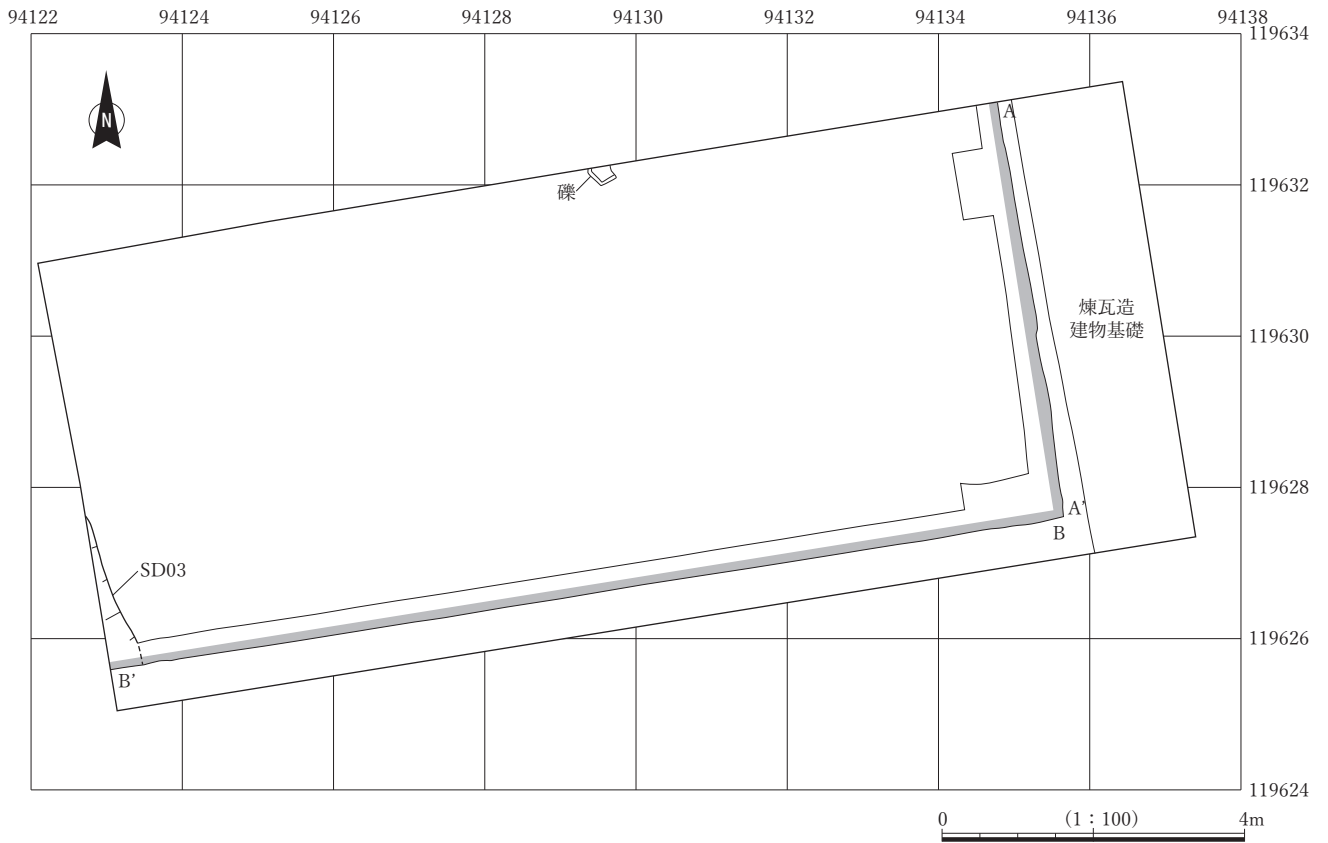
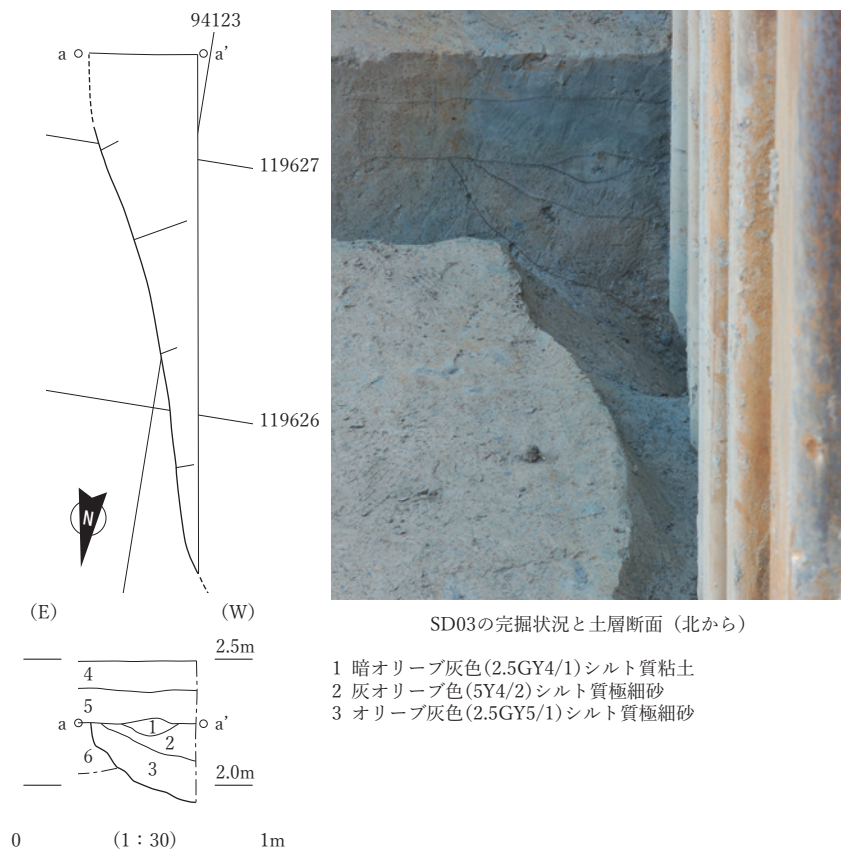


図 3-3 第 2 遺構面の遺構平面図

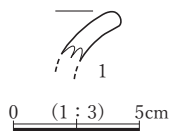


図 3-4 第 2 遺構面の完掘状況（西から）



SD03の完掘状況と土層断面（北から）  
 1 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土  
 2 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細砂  
 3 オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト質極細砂

図 3-5 SD03



番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法		
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面の長さ(mm)	粘土帯幅(mm)
1	SD03	弥生土器・器種不明	-	-	-	-	ナデ/ナデ	10YR6/4にぶい黄橙/ 7.5YR6/4にぶい橙	-	-	-

図 3-6 SD03 出土遺物

い。以上をふまえると、本遺構は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）に位置づけられる可能性が高いといえる。

#### SX03（図 3-2）

調査区南壁の6層上面で確認された。平面的には検出されておらず、遺構であるかは不明である。残存部の長さ0.3mである。断面はレンズ形とみられ、深さ0.1mである。埋土は細砂で、土色は暗青灰色である。埋土から遺物は出土していない。

[時期] 検出層位から縄文時代晩期後葉～同晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）のある時点で形成されたと考えられる。

### 4. 第1.5遺構面・第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面から第1.5遺構面にかけては、基盤層と遺構埋土が同質に近く、遺構の平面形態を明確

に検出することが困難な場合もあった。そのため、本来の掘り込み面より下層で検出した遺構も含まれる。ここでは、両遺構面で検出された遺構を合わせ、縄文時代晩期末～弥生時代前期とそれ以降に位置づけられるものに区分して説明する。

#### (1) 縄文時代晩期末～弥生時代前期

##### SK01・SK01 下層（図 3-7・8・10～13，図版 4・5）

SK01 は調査区中央部やや北側の第 1 遺構面（2 層上面）で検出された。平面形は長軸を南北方向とする楕円形で、北端は隅丸方形に近い形態を呈する。長さ 2.6m，幅 1.0m である。短軸断面はレンズ形で、深さ 0.2m である。埋土は 3 層認められる。いずれもシルトに砂が混ざり、土色は暗灰黄色・黄褐色である。2 層には炭化物が含まれる。

第 1 遺構面を掘り下げ中、つまり第 1.5 遺構面（2～5 層）において、SK01 の真下、約 0.2m から類似した形態をもち、一回り小さい遺構が検出された。これを SK01 下層とした。平面形は SK01 と同様、長軸を南北方向とする楕円形で、長さ 2.3m，幅 0.9m である。短軸断面は逆台形で深さ 0.3m である。埋土は 5 層認められる。いずれもシルトで砂が混ざり、土色は暗灰黄色・黄褐色・灰黄色・灰オリーブ色である。3～5 層には炭化物が含まれる。遺物は 5 層を中心に含まれ、平面的には南東隅に集中するが、中央にも分布している。なお、2・3 層は U 字形もしくは逆台形を呈しており、後述するように木棺の痕跡を示す可能性も想定される。3～5 層に含まれる炭化物も木棺と関係する可能性がある。

さて、調査時に認識された SK01 と SK01 下層の両短軸断面（図 3-10）は連続しておらず、SK01 底部の標高は 2.3m，SK01 下層上面の標高は 2.2m であり、0.1m の開きがある。その一方で、両遺構が平面的にほぼ同じ位置で検出されている点、下位に位置する SK01 下層が一回り小さい点、埋土の粒度と土色が非常に類似している点は、両者がひとつの遺構であることを示唆する。

[SK01 下層出土遺物] 出土遺物は 2～13 である。2 は壺頸胴部で、頸胴部境に 1 条以上の削出突帯を有し、その上端に縁取沈線（深澤，1989，2000）がみられる。3 は壺胴部である。胴部上半に多条の篋描直線文を有し、その上端と下端の断面にはわずかな段がみられる。これは佐原真（1967）の削出突帯第 II 種（多条）に相当する可能性があり、その場合は 7 条の削出突帯となる。4 は壺頸胴部で、胴部最大径のやや上に 2 条の貼付突帯を有し、その直上に篋描直線文 2 条、直下に篋描直線文 2 条以上が施される。貼付突帯の接合面には、篋描直線文状の沈線が 1 条めぐる。5・6 は壺の底部とみられる。

7 は甕である。口縁部は外反し、口唇部下端に刻目を有する。口縁部下に篋描直線文 3 条が施される。外面には明瞭な刷毛目調整がみられる。8～10 は甕の底部と考えられる。10 は外面に赤色顔料が塗布される。11 は器種不明である。縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1 様式）の三谷遺跡（勝浦編，1997）から出土した、浅鉢・鉢・高坏の屈曲部は 11 と類似する形態を呈しており、11 もこれらの器種の可能性がある。12 は器種不明で、底部または蓋の可能性もある。底部としては非常に厚手であり、上げ底状を呈する。凸帯文 IV 期 1 の名東遺跡（勝浦編，1990），I-1 様式の三谷遺跡，I-2 様式に類似した形態の底部はみられない。I-4 様式に出現する紀伊型甕（中村，2000）の

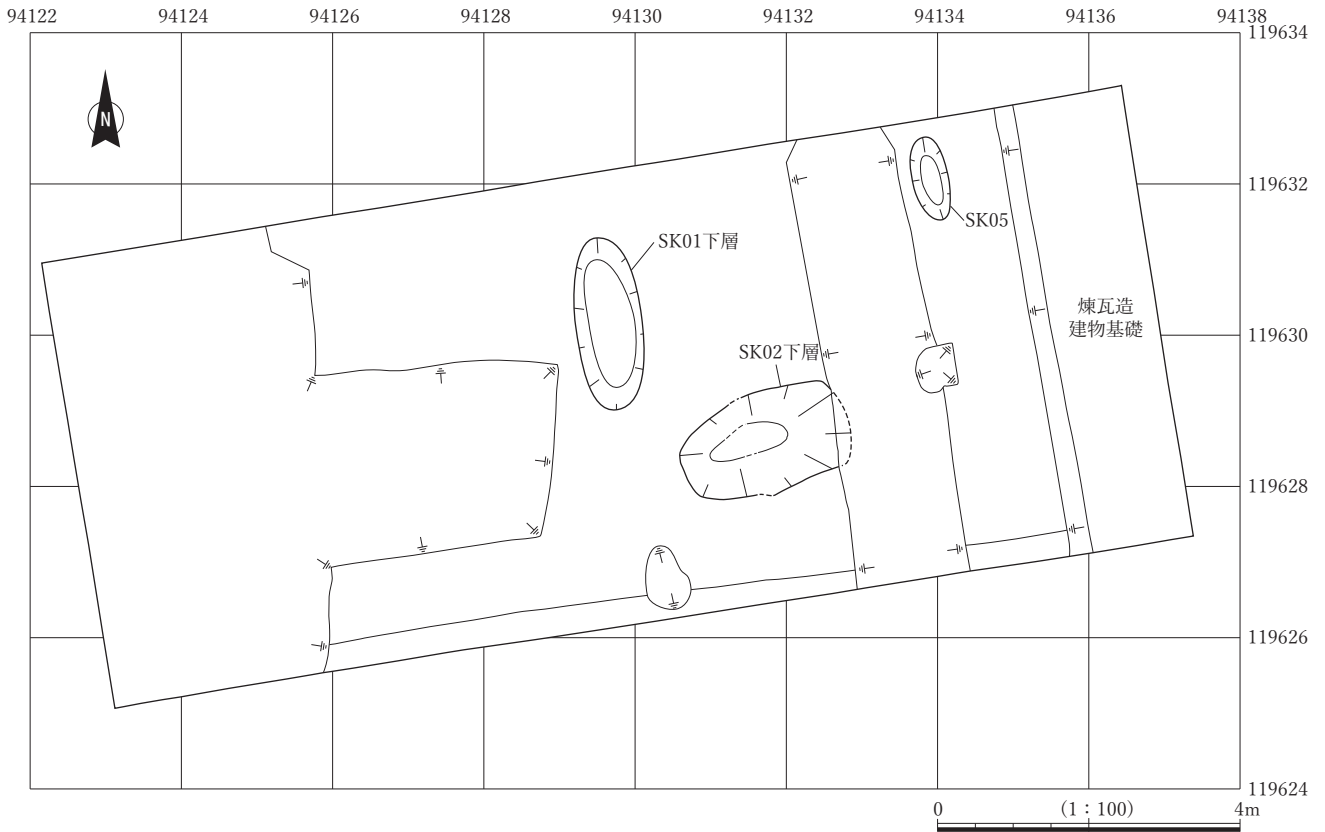
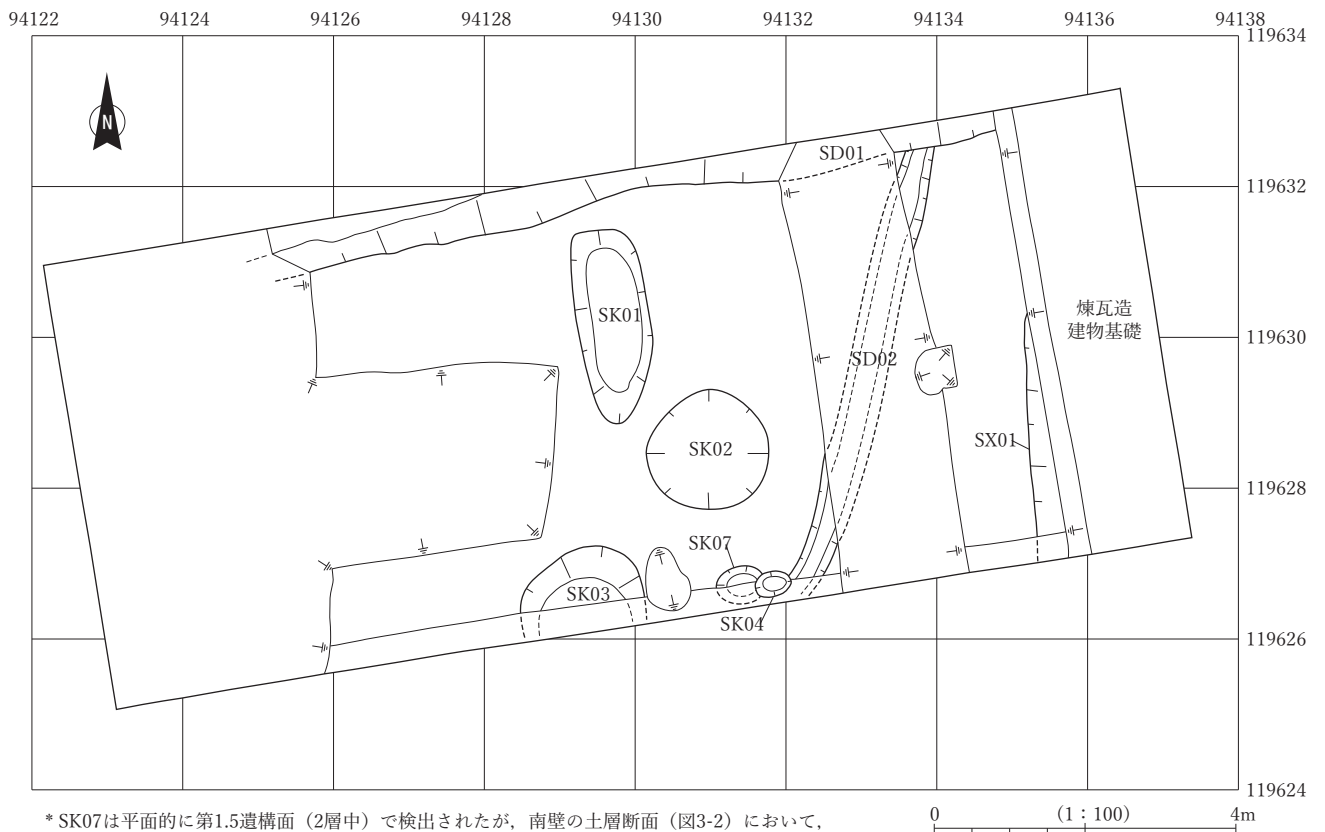


図 3-7 第 1.5 遺構面の遺構平面図



\* SK07は平面的に第1.5遺構面（2層中）で検出されたが、南壁の土層断面（図3-2）において、  
上端が第1遺構面（2層上面）であることが確認される。

\*\* SK06は欠番。

図 3-8 第 1 遺構面の遺構平面図





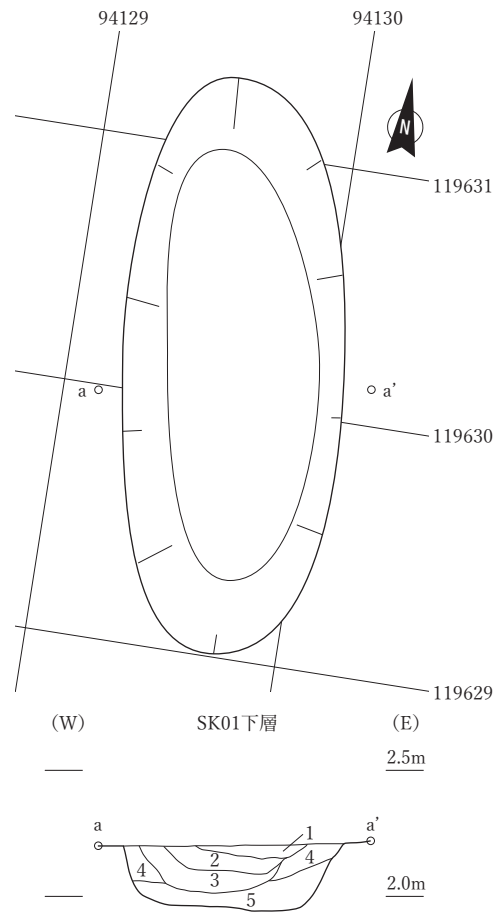
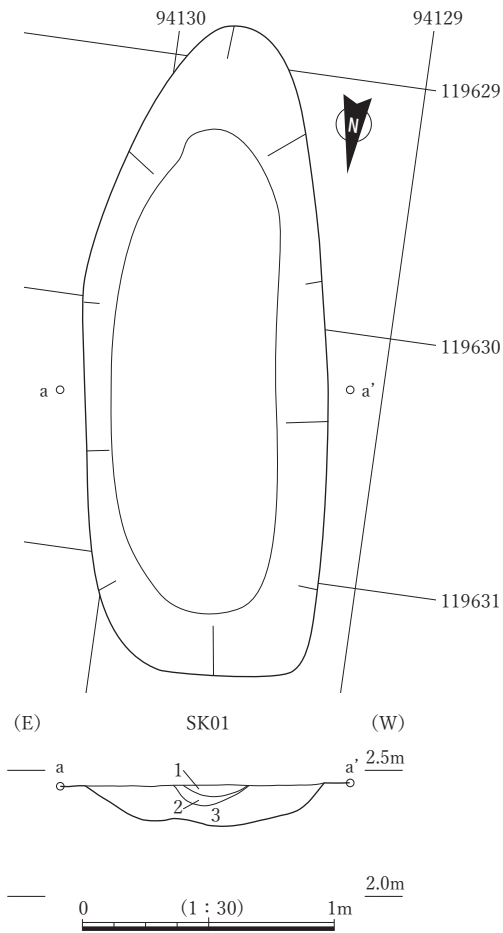
図 3-9 第 1 遺構面の完掘状況（西から）

底部は形態的に類似している。ただし、紀伊型甕は外面の胴部から底部にかけてケズリ調整が認められるが、11 にそれは認められない。

13 はサヌカイト製の粗製剥片石器である。実測図の下端と右端に剥離が連続する部分があり、これらが刃部と考えられる。

中村（2000）の編年案にもとづき、以上の土器の時期を検討する。壺 2 の頸胴部境の削出突帯は弥生時代の I-1・2 様式にみられる。壺 3 の頸胴部境の削出突帯第 II 種（多条）は、事例が少なく時期的指標となっていないが、同（少条）に比べ後出する（佐原，1967）と考えれば、I-2・3 様式に比定されようか。壺 4 の刻目を有する 2 条貼付突帯は貼付 b 種（中村，2000）に相当し I-3・4 の特徴とされる。甕 7 の篋描直線文 3 条は I-1～4 様式を通じてみられ、時期は特定できない。以上を整理すると、出土遺物は弥生時代の I-2・3 様式を中心とし、I-1～4 様式の時期幅が想定される。

[SK01 出土遺物] 出土遺物は 14～17 である。14 は壺頸胴部で、頸胴部境に 1 条以上の削出突帯を有する。上端に縁取沈線はみられないようである。15 は甕で、外反する口縁部をもち、口唇部全面に刻目を有する。口縁部下の削出突帯上には篋描直線文 1 条を有し、これは佐原（1967）の第 II 種（少条）に相当する。器面が摩耗しており、現状で縁取沈線は確認できない。16・17 は塩基性片岩製である。縦断面の下端が鋭角となり、この部分を中心に剥離を有するため、これが刃部となる可



- 1 黄褐色(2.5Y5/3)シルト(砂が混じる) マンガンを含む
- 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(砂が混じる) マンガン・炭化物を多く含む
- 3 黄褐色(2.5Y5/3)シルト(砂が混じる [1層より砂の量が多い]) マンガン・鉄分を多く含む

- 1 灰黄色(2.5Y6/2)シルト(砂が混じる) 黄褐色(2.5Y5/3)シルト(粘性あり)をブロック状に含む マンガン・鉄分を含む
- 2 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト(砂が混じる [1層より砂の量が多い]) 黄褐色(2.5Y5/3)シルト(粘性あり)をブロック状に含む
- 3 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(砂が混じる) マンガン・鉄分を少量含む 炭化物を含む
- 4 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト(砂が混じる) マンガン・鉄分・炭化物を含む
- 5 黄褐色(2.5Y5/3)シルト(砂が少量混じる・粘性あり) マンガン・鉄分・炭化物・土器を含む

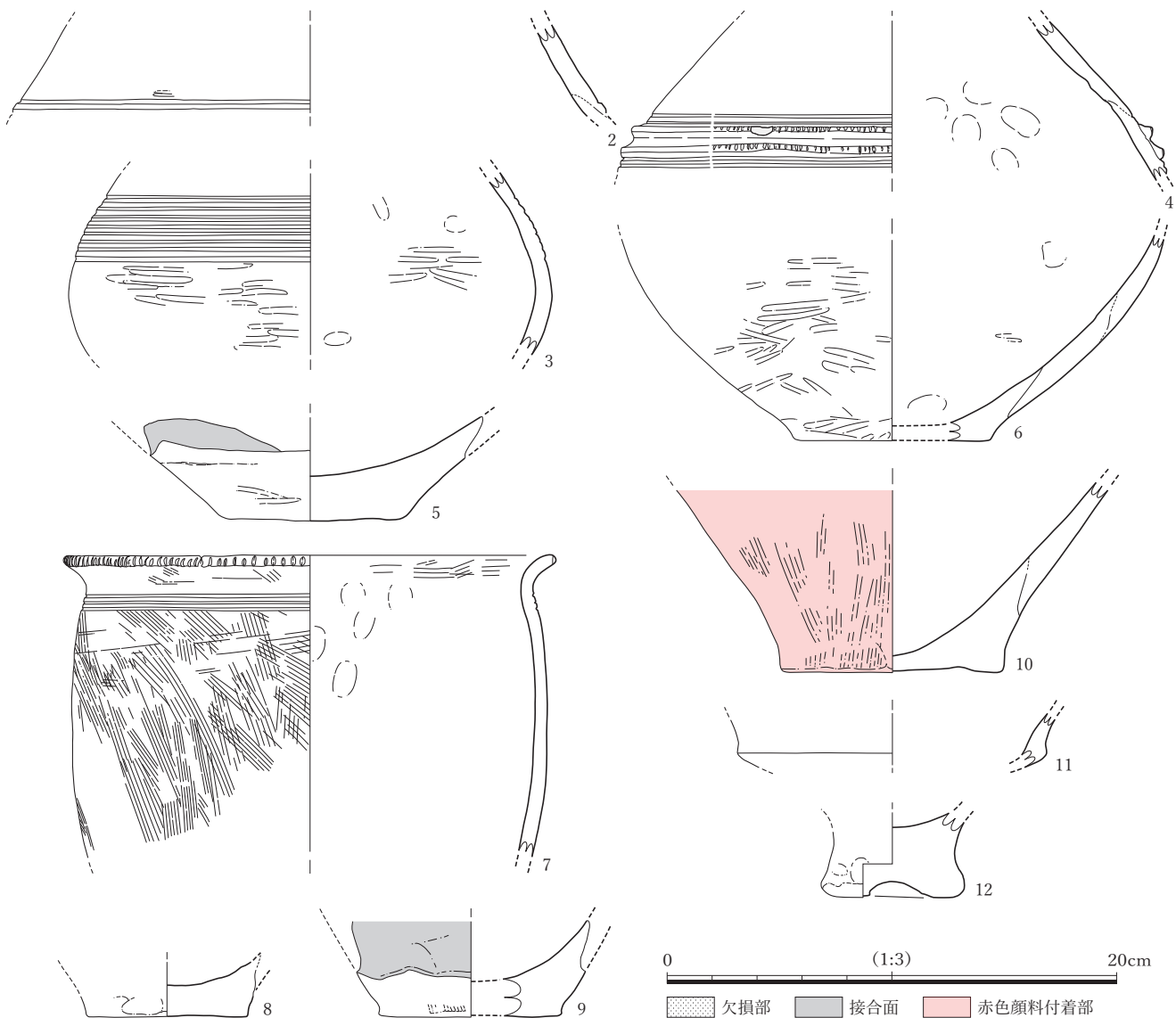


SK01 完掘状況と土層断面 (北から)



SK01 下層の遺物出土状況と土層断面 (南から)

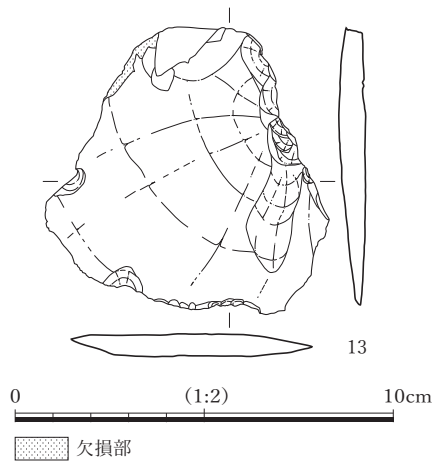
図 3-10 SK01



番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面の長さ(mm)	粘土帯の幅(mm)	
2	SK01 下層	弥生土器・壺	-	-	-	1条以上削出突帯 + 縁取沈線	ミガキ/ナデ	5YR6/6 橙 / 10YR7/3 にぶい黄橙	外傾	-	-	-
3	SK01 下層	弥生土器・壺	-	-	-	7条削出突帯 (篋描直線文9条)	ナデ, ミガキ/ナデ, ユビオサエ, ミガキ	10YR5/3 にぶい黄褐 / 2.5Y5/2 暗灰黄	-	-	-	スス附着
4	SK01 下層	弥生土器・壺	-	-	-	篋描直線文2条, 2条貼付突帯, 篋描直線文2条以上	ナデ/ナデ, ユビオサエ	10YR6/3 にぶい黄橙 / 2.5Y6/1 黄灰	外傾	-	-	-
5	SK01 下層	弥生土器・壺?	-	7.7	-	-	ナデ, ミガキ/ナデ	5YR7/8 橙 / 5YR7/6 橙	外傾	20.0	-	-
6	SK01 下層	弥生土器・壺?	-	(8.8)	-	-	ナデ, ミガキ/ナデ, ユビオサエ, ミガキ	7.5YR5/3 にぶい褐 / 2.5Y4/1 黄灰	外傾	27.5	50.0	-
7	SK01 下層	弥生土器・甕	(21.7)	-	-	口唇部刻目, 篋描直線文3条	刷毛目, ナデ/刷毛目, ナデ, ユビオサエ	10YR5/3 にぶい黄褐 / 7.5YR6/4 にぶい橙	-	-	-	スス附着
8	SK01 下層	弥生土器・甕?	-	(7.2)	-	-	ナデ, ユビオサエ / ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 / 7.5YR6/6 橙	外傾	-	-	-
9	SK01 下層	弥生土器・甕?	-	(8.1)	-	-	刷毛目, ユビオサエ (接合面) / ナデ	5YR6/6 橙 / 5YR6/6 橙	外傾	21.5	-	-
10	SK01 下層	弥生土器・甕?	-	(9.8)	-	赤色顔料	刷毛目, ナデ/ナデ	2.5YR6/6 橙 / 10YR7/2 にぶい黄橙	外傾	-	-	-
11	SK01 下層	弥生土器・高坏 / 浅鉢?	-	-	-	-	不明 / ナデ	10YR3/1 黒褐 / 10YR7/4 にぶい黄橙	-	-	-	外面黒斑 / 黒色化?
12	SK01 下層	弥生土器・器種不明	-	(6.3)	-	-	ユビオサエ, ナデ / ナデ	5YR6/6 橙 / 10YR4/2 灰黄褐	-	-	-	コゲ附着?

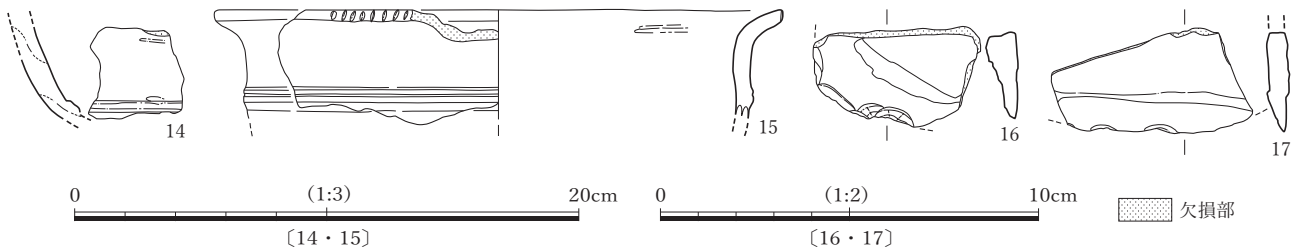
( ) 復元値

図 3-11 SK01 下層出土遺物 (1)



番号	遺構・層位	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材
			長さ	幅	厚さ		
13	SK01 下層	粗製剥片石器	7.5	7.4	0.7	41.78	サヌカイト

図 3-12 SK01 下層出土遺物 (2)



番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法		
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面の長さ(mm)	粘土帯幅(mm)
14	SK01	弥生土器・壺	-	-	-	1条以上削出突帯	ミガキ/ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙/ 10YR6/3 にぶい黄橙	外傾	-	29.0
15	SK01 ベルト	弥生土器・甕	(22.5)	-	-	口唇部刻目, 2条削出突帯 篋描直線文1条	ナデ/ナデ, ミガキ	7.5YR7/6 橙/ 5YR7/6 橙	-	-	-

番号	遺構・層位	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材
			長さ	幅	厚さ		
16	SK01	打製石庖丁?	(2.6)	(4.4)	(0.8)	11.39	塩基性片岩
17	SK01 ベルト	打製石庖丁?	(2.7)	(4.6)	(0.5)	10.68	塩基性片岩

( ) 復元値

図 3-13 SK01 出土遺物

能性がある。打製石庖丁であろうか。

壺 14, 甕 15 の削出突帯第 I・II 種は, 弥生時代の I-1・2 様式に確認される (中村, 2000)。(時期) SK01 は 2 層上面, SK01 下層は 2~5 層で検出されている。2~5 層は縄文時代晩期末/弥生時代前期初頭 (I-1 様式) 頃に形成されており, 両遺構の形成はそれ以降と考えられる。出土土器は, SK01 下層は I-2・3 様式を中心に I-1~4 様式の時期幅をもち, SK01 は I-1・2 様式に位置づけられる。以上より, 本遺構の時期は弥生時代の I-1・3 様式を中心に I-1~4 様式の時期幅が想定される。



## SK02・SK02下層（図3-7・8・14～17，図版5～7）

SK02は調査区中央部の第1遺構面（2層上面）で検出された。平面形は円形で直径1.6mである。さらに、第1遺構面の掘り下げ中の第1.5遺構面（2～5層）において、SK02に重複しつつやや東にずれた位置から遺構が検出され、これをSK02下層とした。平面形は、長軸を東西方向とする隅丸方形もしくは楕円形で、長さ2.2m以上、幅1.4mである。短軸断面は碗形で、深さ0.4mである。埋土は6層認められる。いずれもシルトで砂が混ざり、土色は暗灰黄色・黄褐色・灰オリーブ色である。土器は3層を中心に含まれ、平面的には北東部に集中する。4層には炭化物が多量に含まれている。なお、SK02は基盤層（2～5層）と遺構埋土が類似し、平面的に明確な遺構の輪郭を検出するのが困難であった。そのため、SK02とSK02下層が、同一または別の遺構であるのかは不明である。

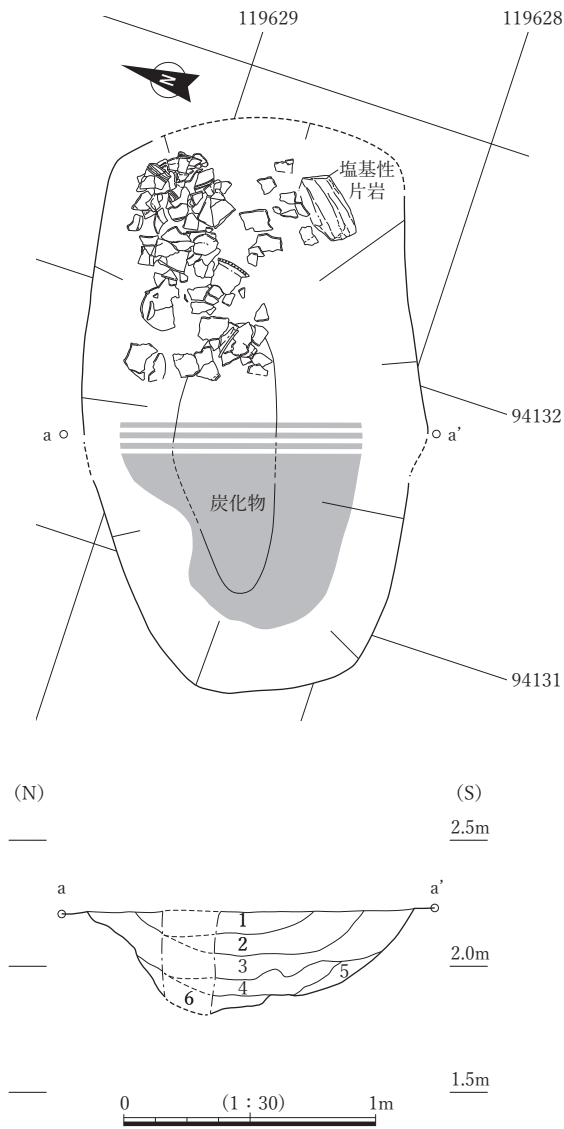
後述するように、少なくともSK02下層は土壌墓または配石墓の可能性はある。遺構南東隅の3層付近、つまり遺構底部からやや浮いた位置で、長さ0.3m、幅0.2mほどの塩基性片岩1点が検出されている。これが配石にあたる可能性がある。さらに、土層断面において明確な木棺の輪郭を確認できるわけではないが、4層に含まれる多量の炭化物とその平面的な広がりから木棺の存在が示唆される。また、完形に近い土器が遺構北東部に集中している。これらは炭化物が集中する4層直上で3層に沿うように断面U字状に広がっている。本来、木棺の上または外に置かれた土器が、木棺の腐敗により生じた空隙部分に落ち込んだまたは流れ込んだ状況が推定される。

[SK02下層出土遺物] 出土遺物は18～37である。18は壺口頸部で、口縁部下に段を有する。19は壺底部と考えられる。18と19は色調・胎土・サイズが類似し、同一個体である可能性が高い。20は小片であるが、口縁部下に段を有する壺口縁部とみられる。21は壺頸胴部である。頸胴部境に段を有するが、段の部分に縁取沈線は確認されない。段より上の頸部に沈線による重弧文または複線山形文が施される。

22は壺である。頸胴部境に段を有し、直下に篋描直線文が3条施される。これは段第Ⅱ種に相当する（佐原，1967）。また、段の部分には縁取沈線がみられる。篋描直線文は、口縁部下に4条、胴部最大径やや上に3条施されている。口縁部下に篋描直線文の切り合いが観察され、時計周りで施文されている。外面の口縁部～胴部下半から内面の口縁部にかけて、赤色顔料が塗布されている。

23は壺口頸部である。部分的にはあるが、外面の口頸部から内面の口縁部にかけて赤色顔料が残存している。24・25は壺の底部から胴部である。24は器面の摩耗が顕著であり、現状で文様は確認できない。

26-1・2は壺頸胴部である。両者は接合しないが、色調・胎土・断面形態・器面調整が類似し、同一個体である可能性が高い。26-1は頸胴部境に段を有し、そこに縁取沈線が観察される。26-2は残存部上端が段に相当する。26-1・2ともに、ミガキ調整の後、1mm以下の沈線で胴部に文様が描かれている。いずれも円形を単位とし、それが横方向に連続するようである。26-1の左側の円は格子、中央の円は横方向の直線で充填されている。右端にも円形の単位があると推定され、縦または斜めの直線で充填されているようである。器面調整・施文順は、ミガキ調整→外周の円形→内部の充填（縦方向の直線→横方向の直線）の順である。26-2は中央に横方向の直線または曲線で充填された円形が描かれ、その左右に同様の円形または菱形の単位が連続する。



SK02下層の遺物出土状況（東から）



SK02下層の炭化物出土状況（西から）

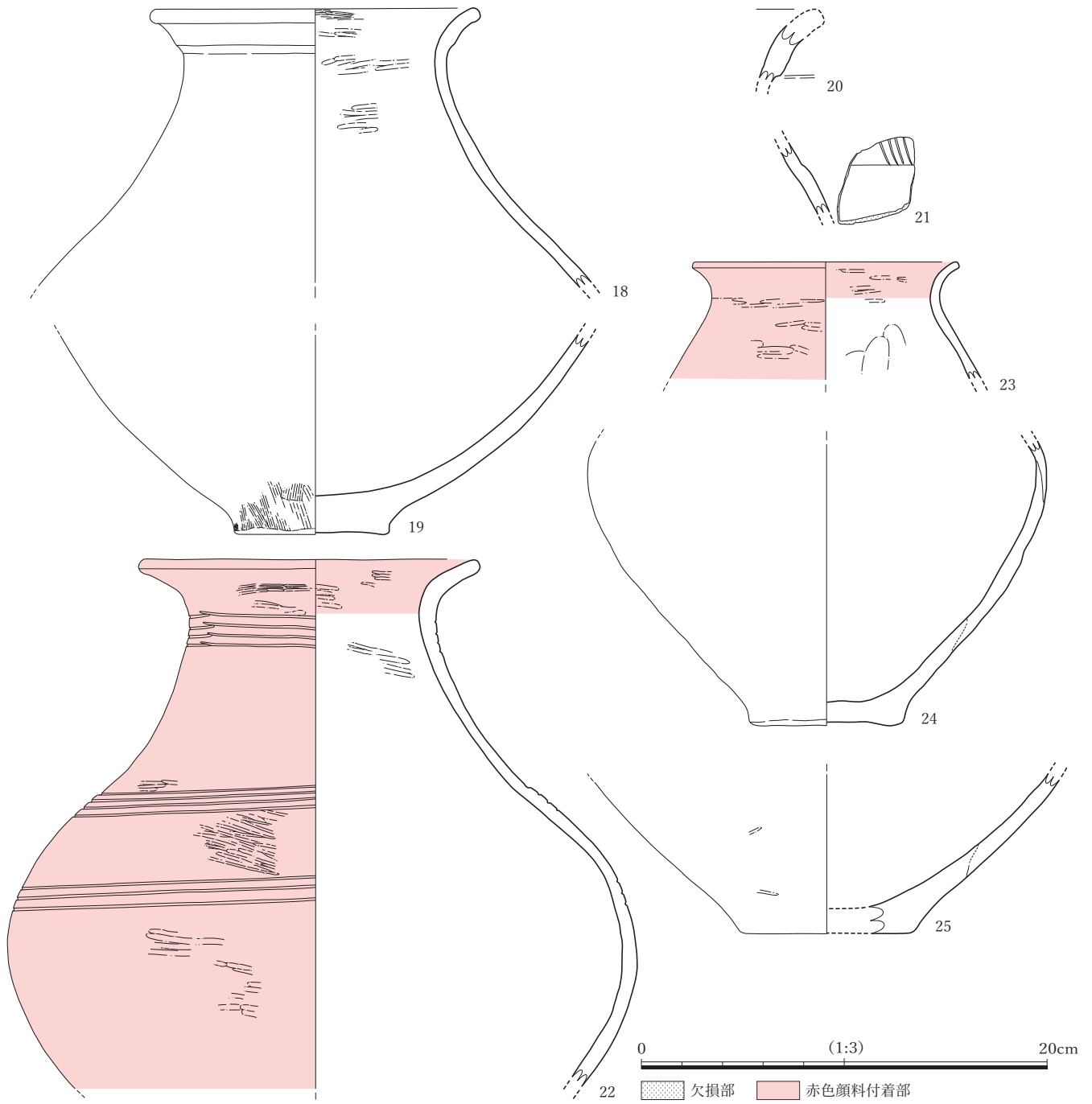


SK02下層の完掘状況と土層断面（西から）

- 1 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト（砂が混じる） マンガン・鉄分・土器片を含む
- 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト（砂が混じる） 1層より鉄分を多く含む マンガン・炭化物を含む
- 3 黄褐色(2.5Y5/3)シルト（砂が混じる） マンガンを多く含む 鉄分・炭化物・土器片を含む
- 4 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト（砂が混じる・粘性あり） マンガン・鉄分を含む 炭化物を多く含む 焼土を含む
- 5 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト（砂が混じる・粘性あり） マンガン・鉄分を含む
- 6 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト（砂が混じる・粘性あり） マンガン・鉄分・炭化物を含む

図 3-14 SK02 下層

27は壺頸胴部である。頸胴部境に段を有し、直下に篋描直線文2条が施されている点から、22と同様、段第Ⅱ種に相当する。また、段には縁取沈線がみられる。篋描直線文が頸部に2条以上、胴部最大径に3条、胴部下半に2条施される。さらに、頸胴部境と胴部最大径の篋描直線文を区分文様とし、区分間文様として横型流水文が描かれている。この横型流水文は、沈線を用いた陰影表現による陽刻

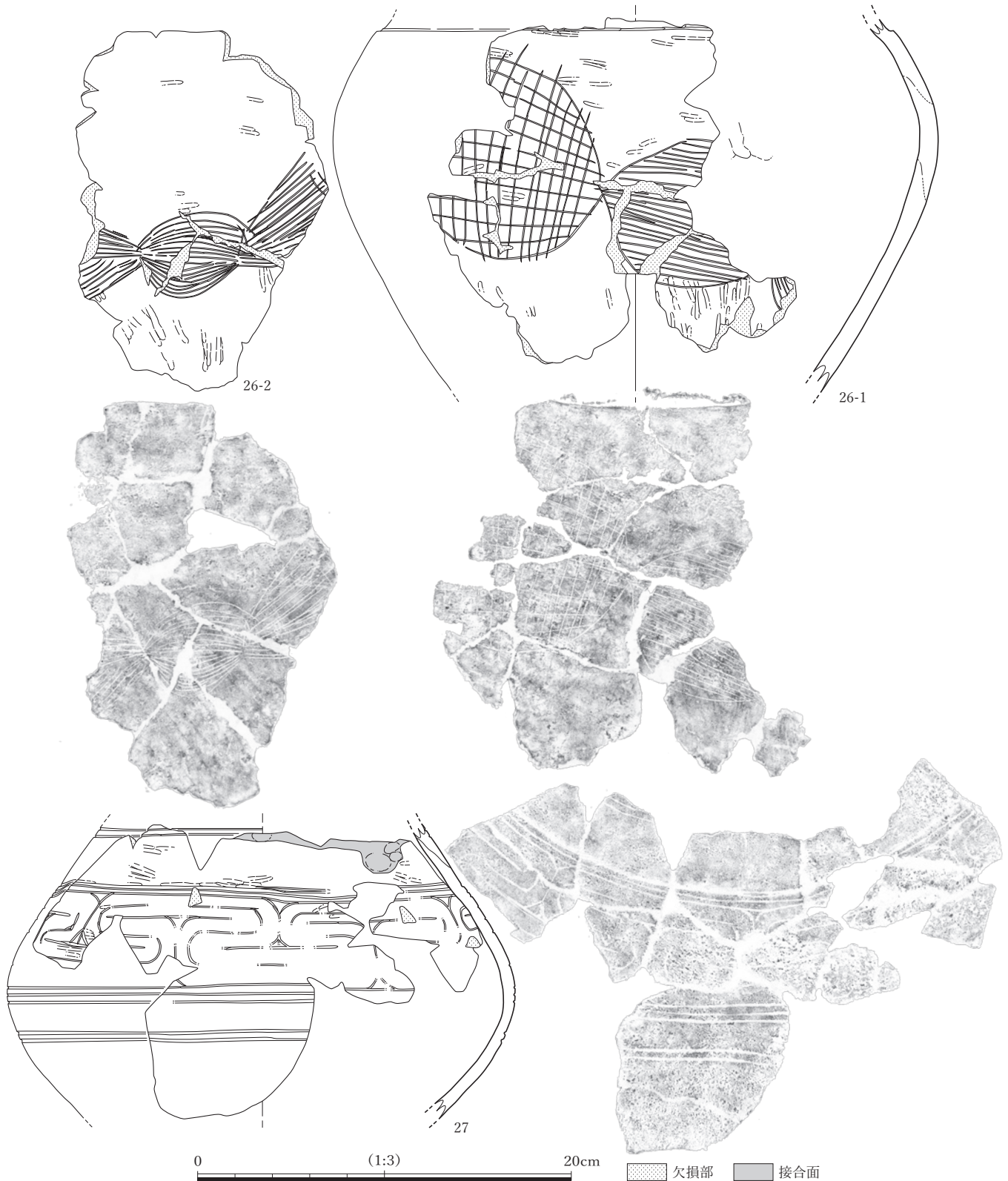


番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面 の傾き	接合面 長(mm)	粘土帯 幅(mm)	
18	SK02 下層	弥生土器・壺	(15.8)	-	-	段 (口縁部下)	ナデ/ナデ, ミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙/ 10YR7/3 にぶい黄橙	-	-	-	-
19	SK02 下層	弥生土器・壺?	-	7.3	-	-	刷毛目/ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙/ 10YR7/3 にぶい黄橙	-	-	-	-
20	SK02 下層	弥生土器・壺	-	-	-	段 (口縁部下)	ナデ/ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙/ 7.5YR6/3 にぶい褐	-	-	-	-
21	SK02 下層	弥生土器・壺	-	-	-	段 (頸胴境), 重弧文/ 複線山形文	不明/ナデ	7.5YR7/6 橙/ 5YR7/6 橙	-	-	-	-
22	SK02 下層	弥生土器・壺	(16.4)	-	-	篋描直線文 4 条, 段 + 縁取 沈線 + 篋描直線文 3 条, 篋 描直線文 3 条, 赤色顔料	ナデ, ミガキ/ナデ, ミガキ	5YR6/6 橙/ 7.5YR6/4 にぶい橙	-	-	-	ミガキ調整→施 文, 覆い型野焼き
23	SK02 下層	弥生土器・壺	(12.9)	-	-	赤色顔料	ナデ, ミガキ/ナデ, ユビオサエ, ミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙/ 7.5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-
24	SK02 下層	弥生土器・壺	-	7.5	-	-	不明/ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙/ 2.5Y4/1 黄灰	外傾	21.5	43.0	覆い型野焼き
25	SK02 下層	弥生土器・壺?	(8.6)	-	-	-	ミガキ/不明	5YR6/6 橙/ 2.5Y7/3 浅黄	外傾	-	-	-

( ) 復元値

図 3-15 SK02 下層出土遺物 (1)

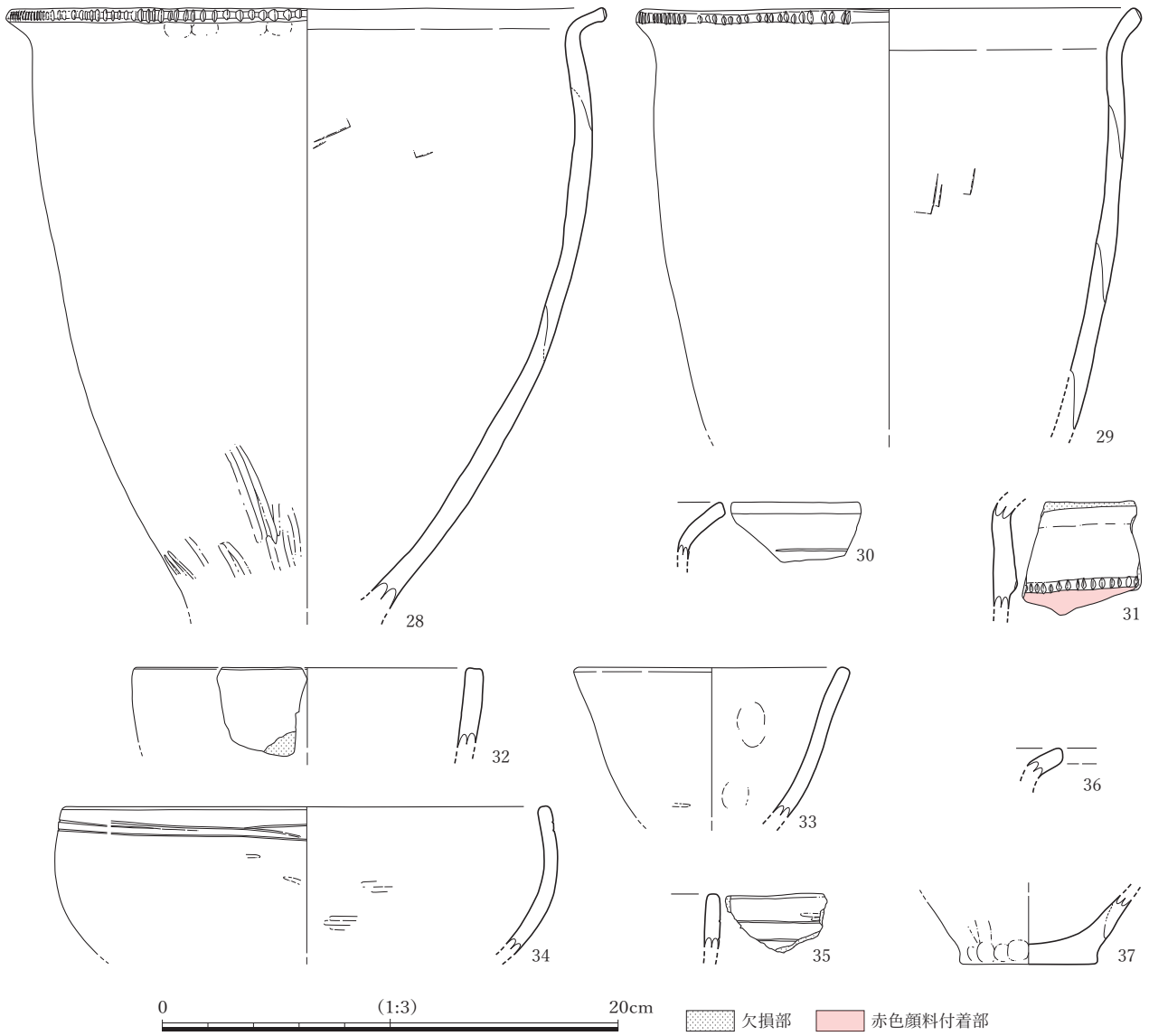




番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面の長さ(mm)	粘土帯幅(mm)	
26-1	SK02 下層	弥生土器・壺	-	-	-	段(頸胴境)+縁取沈線、沈線による幾何学文	ナデ, ミガキ/ナデ	5YR6/6 橙/ 7.5YR6/4 にぶい橙	外傾	-	49.0	ミガキ調整→ 施文
26-2	SK02 下層	弥生土器・壺	-	-	-	段(頸胴境)?、沈線による幾何学文	ナデ, ミガキ/ナデ	5YR6/6 橙/ 7.5YR6/4 にぶい橙	-	-	-	ミガキ調整→ 施文
27	SK02 下層	弥生土器・壺	-	-	-	篋描直線文2条以上、段+縁取沈線+篋描直線文2条、沈線による流水文、篋描直線文3条、篋描直線文2条	ユビオサエ(接合面)、ミガキ/ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙/ 10YR6/4 にぶい黄橙	外傾	26.5	-	ミガキ調整→ 施文

図 3-16 SK02 下層出土遺物 (2)





番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面長(mm)	粘土帯幅(mm)	
28	SK02 下層	弥生土器・甕	26.0	-	-	口唇部刻目	ナデ, ユビオサエ, ミガキ/ナデ, 板ナデ	7.5YR6/4 におい橙/ 10YR7/2 におい黄橙	外傾	25.0	48.0	スス附着, 覆い型野焼き
29	SK02 下層	弥生土器・甕	(21.6)	-	-	口唇部刻目	ナデ/ナデ, 板ナデ	7.5YR6/4 におい橙/ 7.5YR6/4 におい橙	外傾	25.0	57.5	-
30	SK02 下層	弥生土器・甕?	-	-	-	篋描直線文 1 条以上	ナデ/ナデ	7.5YR7/6 橙/ 7.5YR7/4 におい橙	-	-	-	-
31	SK02 下層	弥生土器・甕	-	-	-	刻目段, 赤色顔料	ナデ/ナデ	7.5YR7/6 橙/ 10YR7/2 におい黄橙	-	-	-	-
32	SK02 下層	弥生土器・鉢?	(15.1)	-	-	-	ナデ/ナデ	10YR7/3 におい黄橙/ 7.5YR6/4 におい橙	-	-	-	-
33	SK02 下層	弥生土器・鉢	(11.6)	-	-	-	ミガキ/ナデ, ユビオサエ	10YR5/3 におい黄褐/ 10YR7/3 におい黄橙	-	-	-	-
34	SK02 下層	弥生土器・鉢	(21.0)	-	-	篋描直線文 2 条	ナデ, ミガキ/ナデ, ミガキ	7.5YR6/4 におい橙/ 10YR6/3 におい黄橙	-	-	-	-
35	SK02 下層	弥生土器・鉢?	-	-	-	篋描直線文 2 条以上	ミガキ/ナデ	7.5YR6/4 におい橙/ 7.5YR6/4 におい橙	-	-	-	-
36	SK02 下層	弥生土器・器種不明	-	-	-	-	ナデ/ナデ	10YR6/3 におい黄橙/ 10YR6/2 灰黄褐	-	-	-	-
37	SK02 下層	弥生土器・器種不明	(6.0)	-	-	-	ナデ, ユビオサエ/ナデ	7.5YR6/3 におい褐/ 10YR7/2 におい黄橙	外傾	-	-	覆い型野焼き

( ) 復元値

図 3-17 SK02 下層出土遺物 (3)

表現に分類される（深澤，1989）。器面調整・施文の順は、ミガキ調整→区分文様→区分間文様である。

28・29は甕である。ともに口縁部は外反する。屈曲度は28が強く、29は弱い。ともに口唇部全面に刻目が施される。また、幅広粘土帯－外傾（三阪，2014）による粘土帯の積み上げ方法が確認され、とくに29は積み上げ単位が明瞭に観察される。器面調整については、内外面とも明瞭な刷毛目調整はなく、内面に板ナデ調整の起点が数か所ずつ観察される。28は外面の底部～胴部下位に縦方向のミガキ調整が施されている。30は口縁部である。甕であろうか。口縁部は外反し、口唇部は平らに面取りされる。刻目はみられない。口縁部下に1条以上の篋描直線文が施される。31は甕と推定される。頸胴部境に段を有し、そこに刻目が施されている。これは深澤芳樹（2000）の刻目段に相当する。屈曲部以下に赤色顔料が塗布される。

32～35は鉢と考えられる。32・34・35の口縁部は直立またはわずかに内湾しているのに対し、33の口縁部はわずかに外反し外に開く。34・35は口縁部下に細い篋描直線文が施され、その条数は34が2条、35が2条以上である。36は口縁部片、37は底部である。

以下に、出土土器の時期を検討する。なお、凶化した個体だけではなく、残存率が低く凶化できない個体を含め、確実に刻目突帯文土器といえる土器は含まれていない。壺には段を有するものがみられ、篋描直線文を有さない第Ⅰ種と有する第Ⅱ種が含まれる。口頸部境の段第Ⅰ種（18・20）は弥生時代のⅠ－1・2様式、頸胴部境の段第Ⅰ種（21・26-1・26-2）および段第Ⅱ種（22・27）はⅠ－1様式にみられる属性である（中村，2000）。甕は篋描直線文をもたないものが2点（28・29）と、1条以上のものが1点（30）出土している。甕に篋描直線文が4条以上施されるものが含まれていない点はⅠ－1様式の特徴といえる（中村，2000）。

31は刻目段をもち、甕と推定される。深澤（2000）は、刻目段→直線紋（文）刻目段→両直線紋（文）間刻目の順での型式変化を想定した。直線文刻目段は板付Ⅱa式中頃～Ⅱb式前半に併行し、徳島では弥生時代のⅠ－1・2様式頃に相当（近藤玲，2017）する。刻目段はこれより一段階古く、徳島ではⅠ－1様式に位置づけられる庄・蔵本遺跡第10次調査の溝1（北條編，1998）や、Ⅰ－1様式の三谷遺跡の自然凹地SX02-2（勝浦編，1997）などで出土例がある。よって、刻目段はⅠ－1様式に位置づけられる可能性が高いことがわかる。さらに、縁取沈線（22・26-1・27）や、ミガキ調整後に文様または区分文様・区分間文様を施す手法（22・26-1・26-2・27）は刻目段～直線文刻目段の段階（深澤，2000）、つまりⅠ－1・2様式頃の特徴であることが指摘されている。

以上を整理すると、SK02下層出土土器の時期は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1様式）と合致する特徴が最も多く、当該期に位置づけられる可能性が高いといえる。

これをふまえ、流水文をもつ壺27について検討する。深澤（1989）は弥生時代の流水文を整理している。これによると、木器や骨角器には、前期弥生土器の古中段階に、縄文時代晩期に由来する陽刻表現の長方形と横型の流水文が施されている。一方、土器に陽刻表現による横型流水文が施された事例はわずかである。その出現は古中段階でもかなり新しい段階で、新段階には確実に存在すると指摘されている。壺24は上に述べたように区分文様・区分間文様ともミガキ調整の後に施されている点や、縁取沈線を有する点などの古い要素をもち（深澤，1989，2000）、縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（Ⅰ－1様式）に位置づけられる。すでに中村（2010）が指摘しているが、土器における

陽刻表現の横型流水文の出現は、当時の深澤（1989）の想定より古くなり、I-1様式に遡ることが明らかとなった。

[時期] SK02は2層上面、SK02下層は2～5層で検出されており、上述のように両遺構の形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）以降と考えられる。SK02下層の出土土器はI-1様式頃にまとまる。また、完形に近いものや大型の破片が含まれ、遺構に伴う遺物であろう。よって、少なくともSK02下層は、I-1様式頃に位置づけられる可能性が高いといえる。

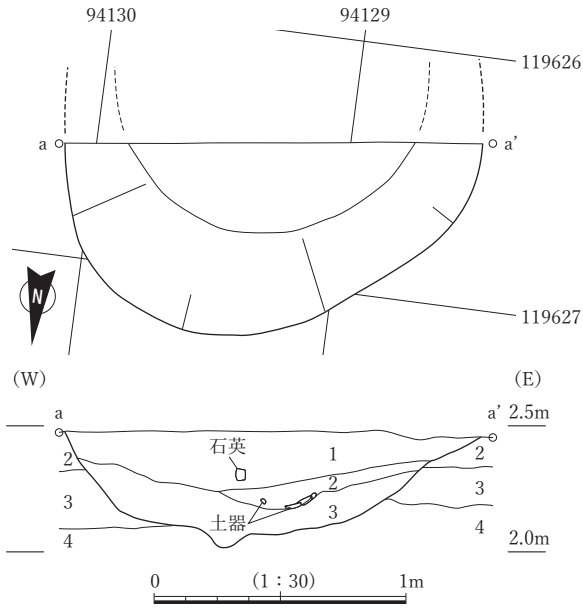
### SK03（図3-8・18・19，図版7）

調査区中央部南隅の第1遺構面（2層上面）で、遺構の北端が検出された。調査区外に遺構が続いており、平面の全形は不明であるが、検出された部分は半円形を呈する。残存部の長さ1.7m、幅0.8mである。断面は碗形で中央部がやや窪み、深さ0.5mである。埋土は3層認められる。いずれもシルトで砂が混ざり、土色は灰黄褐色・にぶい黄褐色・暗灰黄色で、炭化物を含む。2層を中心に土器が出土している。

[出土遺物] 38～46は刻目突帯文土器の深鉢と考えられる。口唇部刻目は、施されないもの（38・39）、口唇部全面に施されるもの（40～42）、口唇部下端に施されるもの（43）の3者がある。43の口唇部と口縁部下の突帯文上の刻目は、上下一度に施されたものと考えられる。口縁部の突帯文は、口唇部からわずかに下がった位置にめぐるもの（38）と、口唇部から1cm程下にめぐるもの（39～43）がある。突帯文の断面形態は、低く不明瞭で蒲鋒型・三角形・台形を呈するもの（38～42・44～46）と、高く明瞭で三角形を呈するもの（43）に分かれる。突帯文上の刻目は平面菱形を呈するもの（38・40～45）が中心で、中央部に縦方向の稜が残る。木製板工具によって施文されたものであろうか。46は器面の摩耗が顕著で刻目は不明瞭である。39の突帯文は不整形で、残存部に刻目はみられない。43は外面の口縁部下に縦方向の沈線が3条施されており、これらは文様と考えられる。同様の事例は、縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）に位置づけられる三谷遺跡の自然凹地SX02-2（勝浦編，1997）でも確認される。38～46の器面調整は、すべての個体でナデ調整が確認され、一部（39・45・46）には外面にケズリ調整が観察される。47は外面にケズリ調整が確認される点をふまえると、刻目突帯文土器の胴部と推定される。粘土帯の積み上げ方法は、幅狭粘土帯－内傾（三阪，2014）によるもの（39・41・44～47）のみ確認される。

48は甕の口縁部と考えられる。外反する口縁部をもち、口唇部下端に刻目を有する。

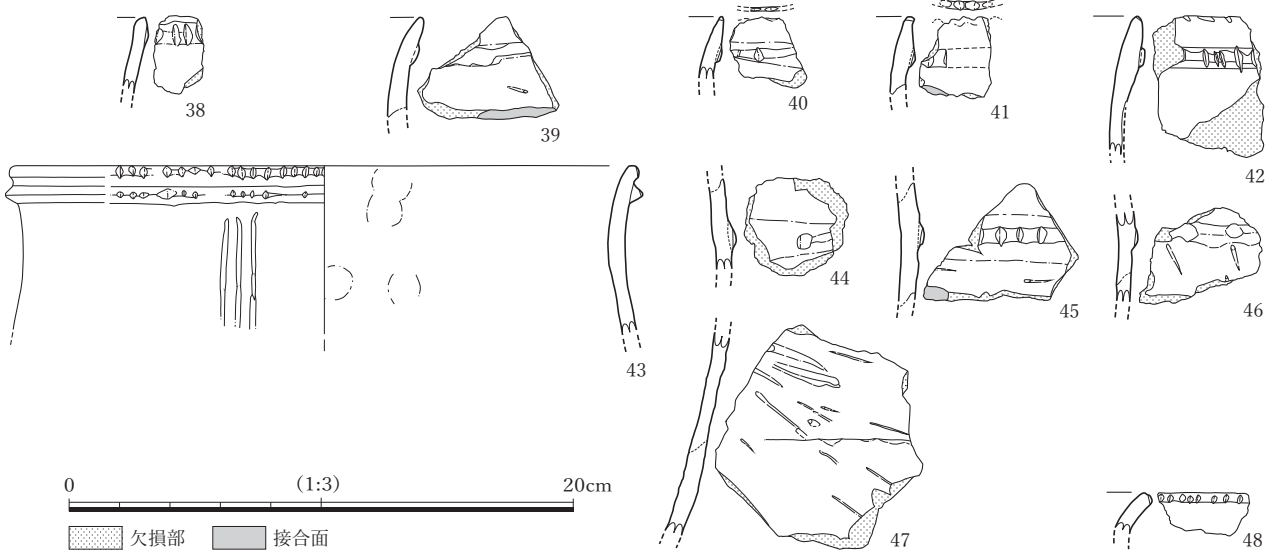
以上の土器の時期について検討する。本遺構から出土した土器のうち、図化できたものは刻目突帯文土器の深鉢10点、遠賀川式土器の甕とみられる個体1点である。図化したもの以外に、赤色磨研を施した壺胴部と推定される破片も含まれる。図化していない小片を含めると、突帯文土器の比率が遠賀川式土器より高いと考えられる。また、完形品やそれに近いものはなく、いずれも小片で出土している点の特徴である。勝浦康守（2000）は、三谷遺跡出土の刻目突帯文を有する深鉢について、時期が新しくなるにつれ、口唇部刻目を有する個体が増加し、突帯文が口唇部から下に離れていくという型式変化を想定している。これは漸的な傾向を示すものであり、SK03の刻目突帯文土器の細かな所属時期を決定することは難しいが、I-1様式におさまることは確実である。遠賀川式土器の



SK03の完掘状況と土層断面（北から）

- 1 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細砂 炭化物を含む
- 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細砂 炭化物を含む
- 3 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細砂 炭化物を含む

図 3-18 SK03

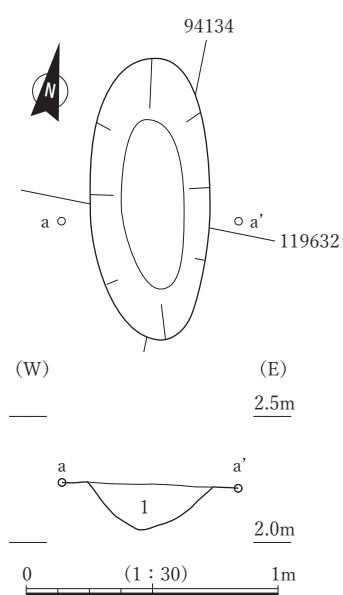


番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面 の傾き	接合面 長(mm)	粘土帯 幅(mm)	
38	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	刻目突帯文	ナデ/ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐/ 2.5YR5/6 明赤褐	-	-	-	-
39	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	無刻目?突帯文	ケズリ, ナデ/ナデ	5YR5/3 にぶい赤褐/ 7.5YR5/3 にぶい褐	内傾	0.8	-	-
40	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	口唇部刻目, 刻目突帯文 (口縁部下)	ナデ/不明	7.5YR6/4 にぶい橙/ 10YR7/3 にぶい黄橙	-	-	-	-
41	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	口唇部刻目, 刻目突帯文 (口縁部下)	ナデ/ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐/ 5YR6/4 にぶい橙	内傾	0.8	-	-
42	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	口唇部刻目, 刻目突帯文 (口縁部下)	ナデ/不明	5YR6/6 橙/ 10YR6/3 にぶい黄橙	-	-	-	-
43	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	(24.4)	-	-	口唇部刻目, 刻目突帯文 (口縁部下), 沈線による 文様	ナデ/ナデ, ユビオ サエ	10YR7/3 にぶい黄橙/ 7.5YR6/3 にぶい褐	-	-	-	-
44	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	刻目突帯文 (胴部)	ナデ/ナデ	7.5YR5/2 灰褐/ 7.5YR5/3 にぶい褐	内傾?	-	-	-
45	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	刻目突帯文 (胴部)	ケズリ, ナデ/ナデ	10YR5/2 灰黄褐/ 2.5Y5/1 黄灰	内傾?	-	-	-
46	SK03	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	刻目突帯文 (胴部)	ナデ, ケズリ/ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐/ 10YR5/2 灰黄褐	内傾?	0.7	-	種実圧痕 (外 面)?
47	SK03	縄文/弥生土器・深鉢?	-	-	-	-	ケズリ, ナデ/ナデ	10YR4/2 灰黄褐/ 10YR4/1 褐灰	内傾?	0.9	-	-
48	SK03	弥生土器・甕?	-	-	-	口唇部刻目	ナデ/ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙/ 7.5YR6/6 橙	-	-	-	スス附着

( ) 復元値

図 3-19 SK03 出土遺物





SK05の完掘状況と土層断面（南から）

1 黄褐色(2.5Y5/3)シルト（砂が混じる・粘性あり） マンガン・鉄分を含む

図 3-20 SK05

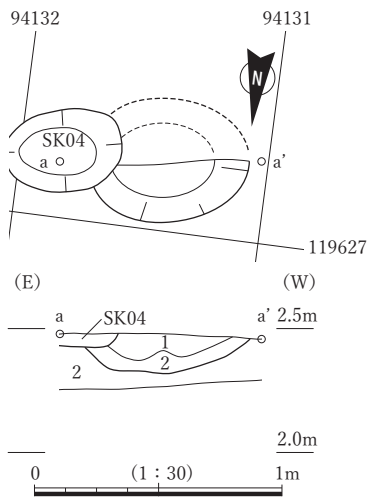
甕のなかで、口唇部下端に刻目を有するもの（48）は、I-1様式の特徴とされ（中村，2000）、三谷遺跡の甕にも多く観察される。以上より、本遺構出土土器は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）に位置づけられる。

[時期] 本遺構は2層上面で検出されており、その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）以降と考えられる。埋土出土土器の時期はI-1様式にまとまる。以上から、本遺構の時期はI-1様式に位置づけられる。

SK05（図 3-7・20）

調査区北東部の第1.5遺構面（2～5層）において検出された。平面形は、長軸を南北方向とする楕円形で、長さ1.1m、幅0.5mである。短軸断面は碗形で、深さ0.2mである。埋土は1層認められる。シルトに砂が混ざり、土色は黄褐色である。埋土に土器が含まれる。土器が出土しているが、図化できるものはない。ただし、これらは他遺構の弥生時代前期の土器と胎土や色調が類似し、当該期の所産である可能性が高い。

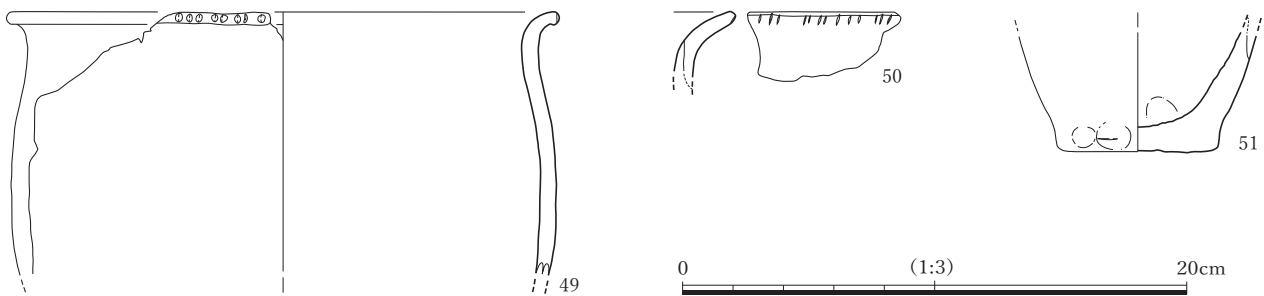
[時期] 本遺構は2～5層で検出されており、その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）以降と考えられる。また、後述する古墳時代中期～平安時代と推定されるSD02より下層に形成されている点から、縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）～平安時代の時期幅が想定される。さらに、埋土から出土した土器は小片しかないが、弥生時代前期の可能性が高い。加えて、埋土は弥生時代前期のSK01・02・03と類似する。以上から、本遺構の時期は弥生時代のI-1～4様式に位置づけられる可能性が高いといえる。また、弥生時代前期のSK01と長軸を同じくする点もこれを傍証する。



SK07の土層断面（北から）

- 1 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質細砂 炭化物・焼土を含む
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質細砂 マンガン含む 炭化物・焼土(赤褐色2.5YR4/6)を多量に含む

図 3-21 SK07



番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法		
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面の長さ(mm)	粘土帯の幅(mm)
49	SK07	弥生土器・甕	(21.6)	-	-	口唇部刻目	ナデ/ナデ	7.5YR4/2 灰褐/ 7.5YR4/3 褐	-	-	-
50	SK07	弥生土器・甕?	-	-	-	口唇部刻目	ナデ/ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙/ 7.5YR6/4 にぶい橙	外傾	-	-
51	SK07	弥生土器・甕?	-	(6.4)	-	-	ナデ, ユビオサエ/ ナデ, ユビオサエ	2.5YR5/6 明赤褐/ 5YR5/6 明赤褐	外傾	-	-

( ) 復元値

図 3-22 SK07 出土遺物

### SK07 (図 3-8・21・22, 図版 8)

調査区中央部南隅の第 1.5 遺構面 (2 層中) で、遺構の北端が検出された。南壁の土層断面において、上端が 2 層上面であることが確認される (図 3-2)。調査区外に遺構が続いており、平面の全形は不明であるが、検出された部分は半円形を呈する。残存部の長さ 0.7m, 幅 0.2m である。断面はレンズ形で、深さ 0.2m である。埋土は 2 層認められる。いずれもシルト質細砂で、土色は黄褐色・灰黄褐色である。炭化物・焼土・土器が含まれる。SK04 に切られる。

[出土遺物] 49・50 は外反する口縁部をもつ甕である。49 は口唇部全面に刻目が施される。篋描直線文はみられず無文である。50 の口縁部は大きく開き、口唇部下端に幅狭の刻目が施される。51 は

底部である。50・51には幅広粘土帯－外傾による粘土の積み上げ方法が確認される。

以上の土器の時期について検討する。甕の口唇部下端の刻目（50）は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）の特徴とされる。また、甕の胴部上半が無文であるもの（49）はI-1～4様式にかけ存続する。土器の出土数が少なく時期を絞り込むことは難しいが、I-1～4様式の時期幅が想定される。図化できない土器についても、弥生時代前期の土器と胎土や色調が類似するものに限られる。

[時期] 本遺構は2層上面で検出されている点から、その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）以降と考えられる。また、後述する古墳時代中期～近世・近代のSK04に切られている点から、縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）～近世・近代の時期幅が想定される。これに加え、出土遺物が弥生時代のI-1～4様式の時期幅におさまる点と、埋土がSK01～03・05と類似する点から、本遺構は弥生時代前期に位置づけられる可能性が高いといえる。

#### SX02（図3-2）

調査区東壁の2層上面で検出され、1層に被覆されている。平面的には検出されておらず、遺構であるかは不明である。残存部の長さ0.4mである。断面は碗形で、深さ0.1mである。埋土は1層認められる。シルトで土色は褐灰色である。埋土に遺物は含まれない。東壁断面において、後述する時期不明のSX01より下層に形成されていることがわかる。

[時期] 本遺構は2層上面で検出され、1層に被覆されている点から、その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）と考えられる。

### (2) 弥生時代前期以降

#### SD02（図3-8・23・24，図版8）

調査区東側の第1遺構面（1層上面もしくは2層上面）で検出された。北側と南側で離れて検出され、その間は攪乱により残存していないが、幅・深さ・埋土や平面的な角度からみて一連の溝である可能性が高い。南北方向にのび、攪乱部分を含めると残存部の長さ5.9m、幅0.5mである。埋土は1層認められ、粘性をもつシルトで土色は暗オリーブ褐色である。土器が出土している。SD01とSK04に切られ、SK05よりも上に形成される。

[出土遺物] 52は壺の胴部であろうか。篋描直線文が1条施される。53は2条以上の貼付突帯で、刻目を有する。壺の頸部付近に施されたものであろうか。54は甕胴部であろうか。幅広粘土帯－外傾による粘土の積み上げ方法が確認される。

以下に土器の時期について検討する。52に篋描直線文が施される点、54に幅広粘土帯－外傾による粘土の積み上げ方法が採用されている点から、弥生時代のI-1～4様式の時期幅が想定される。53は中村（2000）の貼付突帯b種に相当し、I-3・4様式に位置づけられる。このほかに、図化できないもののなかに須恵器の小片が含まれている。その時期を特定するのは難しいが、古墳時代中期以降～平安時代の所産といえる。

[時期] 本遺構は南端部は2層上面で検出されており、その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）以降と考えられる。さらに、弥生時代前期と推定されるSK05よりも上に形成され、近世・

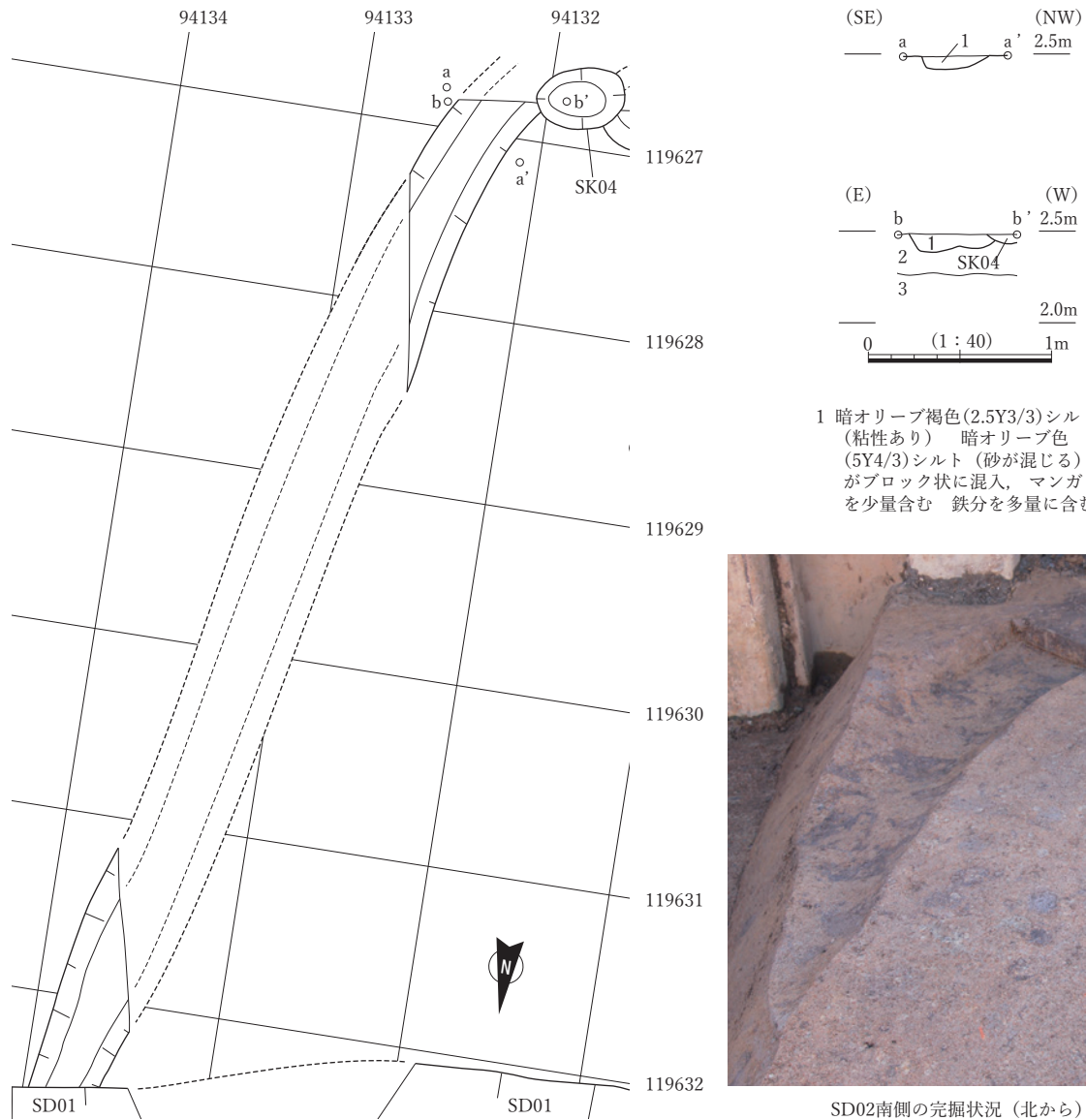
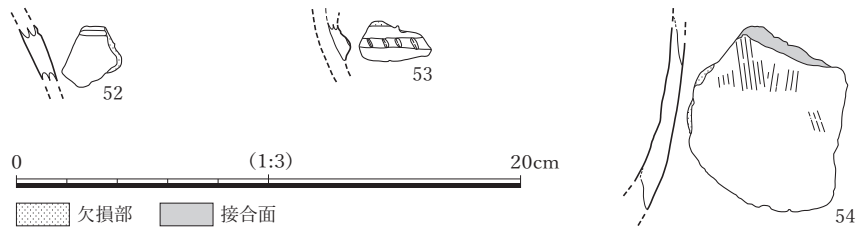


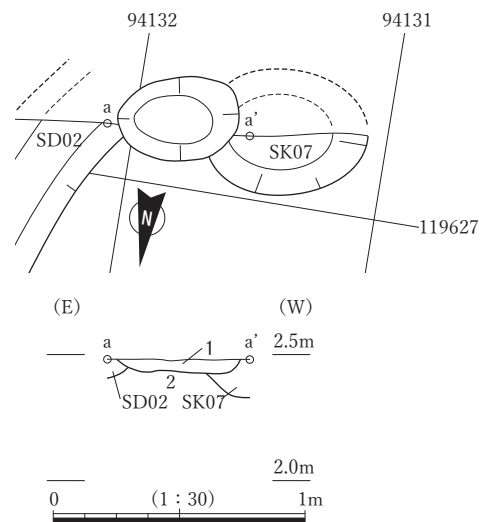
図 3-23 SD02



番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法		
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面の長さ(mm)	粘土帯幅(mm)
52	SD02	弥生土器・壺?	-	-	-	篋描直線文1条以上	ナデ/ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐 / 7.5YR6/4 にぶい橙	-	-	-
53	SD02	弥生土器・壺?	-	-	-	2条以上貼付突帯	ナデ/不明	10YR5/4 にぶい黄褐 / 10YR7/4 にぶい黄橙	-	-	-
54	SD02	弥生土器・甕?	-	-	-	-	刷毛目, ナデ/ナデ, ユビオサエ	10YR5/3 にぶい黄褐 / 5YR6/6 橙	外傾	-	58.5

図 3-24 SD02 出土遺物



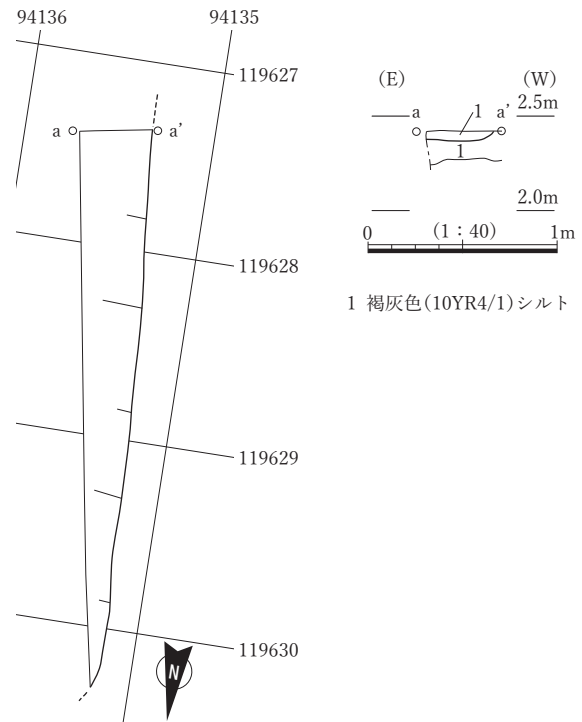


1 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト(砂が混じる) 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト(砂が混じる・粘性あり)がブロック状に混入 マンガン・鉄分を含む



SK04土層断面（北から）

図 3-25 SK04



1 褐灰色(10YR4/1)シルト



SX01土層断面（西から）

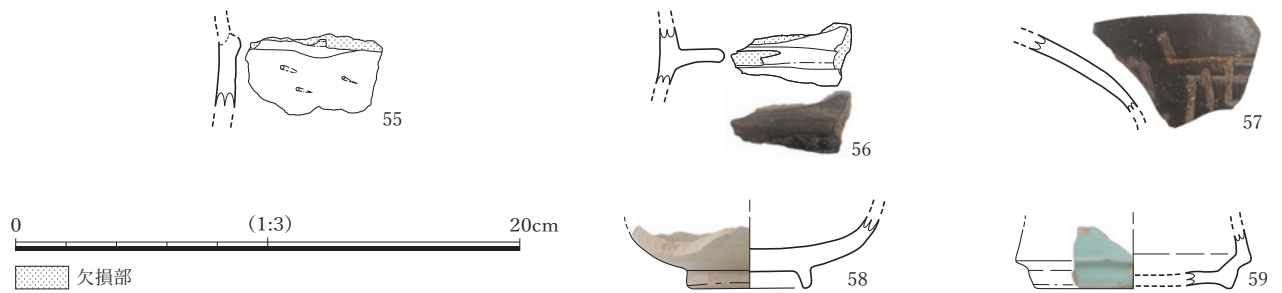
図 3-26 SX01

近代の SD01 に切られている点から、弥生時代前期～近世・近代に絞り込まれる。埋土からは弥生時代前期の土器と須恵器が出土している。この須恵器が混入したものではないとすれば、本遺構は古墳時代中期～平安時代に所属する可能性が高いといえる。埋土は粘性をもつシルトで土色の明度も低く、弥生時代前期の SK01～03・05・07 のものとは異質である。この点は本遺構が弥生時代前期とは異なる時期の所産であることを示唆する。

#### SK04（図 3-8・25）

調査区中央部南隅の第 1 遺構面（2 層上面）で検出された。平面形は楕円形で、長径 0.5m、短径 0.3m である。埋土は 1 層認められる。シルトで砂が混じり、土色はオリーブ褐色である。弥生土器もしくは土師器とみられる小片が含まれるが、図化できるものはなく時期は不明である。SD02 と SK07 を切る。

〔時期〕 本遺構は 2 層上面で検出されている点から、その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1 様式）以降と考えられる。弥生時代前期の SK07 と古墳時代中期～平安時代と推定される SD02 を切っている。遺構の切り合い関係から、古墳時代中期～近世・近代のいずれかの時期に所属するものと推定される。なお、埋土は弥生時代前期の SK01～03 と類似しているが、上述の遺構の



番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法		
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面の長さ(mm)	粘土帯幅(mm)
55	SD01	縄文/弥生土器・深鉢?	-	-	-	刻目?突帯文	ケズリ/ナデ	7.5YR5/3 っぽい褐 / 7.5YR5/2 灰褐	内傾?	-	-

番号	遺構・層位	胎質	器種	生産地	法量 (cm)			成形技法	調整 (外/内)	釉薬	銘・刻印・墨書	胎土色調 (外/内)	製作年代	備考
					口径	底径	器高							
56	SD01	瓦質土器	羽釜/茶釜	不明	-	-	-	型成形, 貼付(鏝部)	回転ナデ/回転ナデ	-	-	10YR4/1 褐灰 / 7.5YR6/1 褐灰	不明	スス付着
57	SD01	陶器	瓶	大谷焼	-	-	-	ロクロ	-	鉄釉(外面)	陰刻(ヘラ彫り)「酒」?の文字	10YR2/3 黒褐 / 2.5YR4/4 っぽい赤褐	19世紀	慣用名「口長」
58	SD01	陶器	碗	瀬戸・美濃系	-	4.9	-	ロクロ	-	灰釉/透明釉(畳付除く)	-	2.5Y8/1 灰白 / 2.5Y8/1 灰白	不明(太白手であれば18世紀後葉~19世紀前葉)	太白手?, 貫入あり
59	SD01	磁器	水注?	関西系	-	(7.8)	-	ロクロ	-	青磁釉(畳付除く)	-	-	不明	-

( ) 復元値

図 3-27 SD01 出土遺物

切り合いから弥生時代前期の遺構とは考えにくい。

SX01 (図 3-8・26)

調査区東南隅の第1遺構面(1層上面)で検出された。遺構の全形は不明であるが、残存部は南北方向にのびる。残存部の長さ3.0m, 幅0.4mである。埋土は1層認められる。シルトで土色は褐灰色である。弥生土器または土師器とみられる小片が含まれるが、図化できるものはなく時期は不明である。

[時期] 本遺構は1層上面で検出されている点から、その形成は縄文時代晩期末/弥生時代前期初頭(I-1様式)以降と考えられる。また、埋土は弥生時代前期のSK01~03のものとは異なる。これは本遺構がこれらと異なる時期の所産であることを示唆するが、具体的な時期は不明である。

SD01 (図 3-8・27, 図版 8)

調査区北隅の第1遺構面(1層上面もしくは2層上面)で、その南半部が検出されている。東西方向にのびる溝と考えられ、残存部の長さ9.3m, 幅0.7mである。埋土からは土器と陶磁器が出土している。SD02を切る。

[出土遺物] 55は刻目突帯文土器の深鉢で、胴部屈曲部付近と考えられる。突帯文を有するが刻目の有無は不明である。器面調整は、外面が横方向のケズリ調整, 内面がナデ調整である。また、屈曲部に幅狭粘土帯-内傾と推定される粘土帯の積み上げ方法がみられる。56は瓦質土器の羽釜鏝部である。外面にススが付着し、とくに鏝部以下はススの付着が顕著である。57は大谷焼の瓶肩部である。

陰刻によって「酒」と推定される文字が施される。58は瀬戸・美濃系陶器の碗である。釉薬は灰釉もしくは透明釉である。高台内にも施釉されており、こういった事例は瀬戸・美濃系陶器では少ない。太白手の可能性もあるが、口縁部が欠損しているため不明である。59は関西系磁器である。器種不明である。水注であろうか。青磁釉が施される。

以上の出土遺物の時期を検討する。刻目突帯文土器55は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）に位置づけられる。瓦質土器羽釜56の時期を特定することは難しい。近世のものであるうか。大谷焼57は19世紀代とみられる（日下, 2002）。瀬戸・美濃系陶器58の時期は不明であるが、太白手であれば製作年代は18世紀後葉～19世紀前葉となる（長佐古, 1991）。凶化した遺物以外には、弥生土器、土師器、陶磁器の小片が含まれる。

[時期] 本遺構は1層上面もしくは2層上面で検出されている点から、その形成は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）以降と考えられる。さらに、古墳時代中期～平安時代と推定されるSD02を切っている点から、本遺構の時期は少なくとも古墳時代中期以降といえる。さらに、近世・近代の陶磁器の量が一定程度含まれている点から、本遺構は近世・近代の所産である可能性が高いと推定される。

## 5. 包含層出土遺物

本地点の包含層では、縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）の洪水起源砂層と推定される黄褐色シルト層（1～5層）を中心に、その直上の弥生時代前期末／中期初頭（I-3・4様式）～中世の土壌化層と考えられる黒褐色シルト層にかけてより、遺物が出土している。

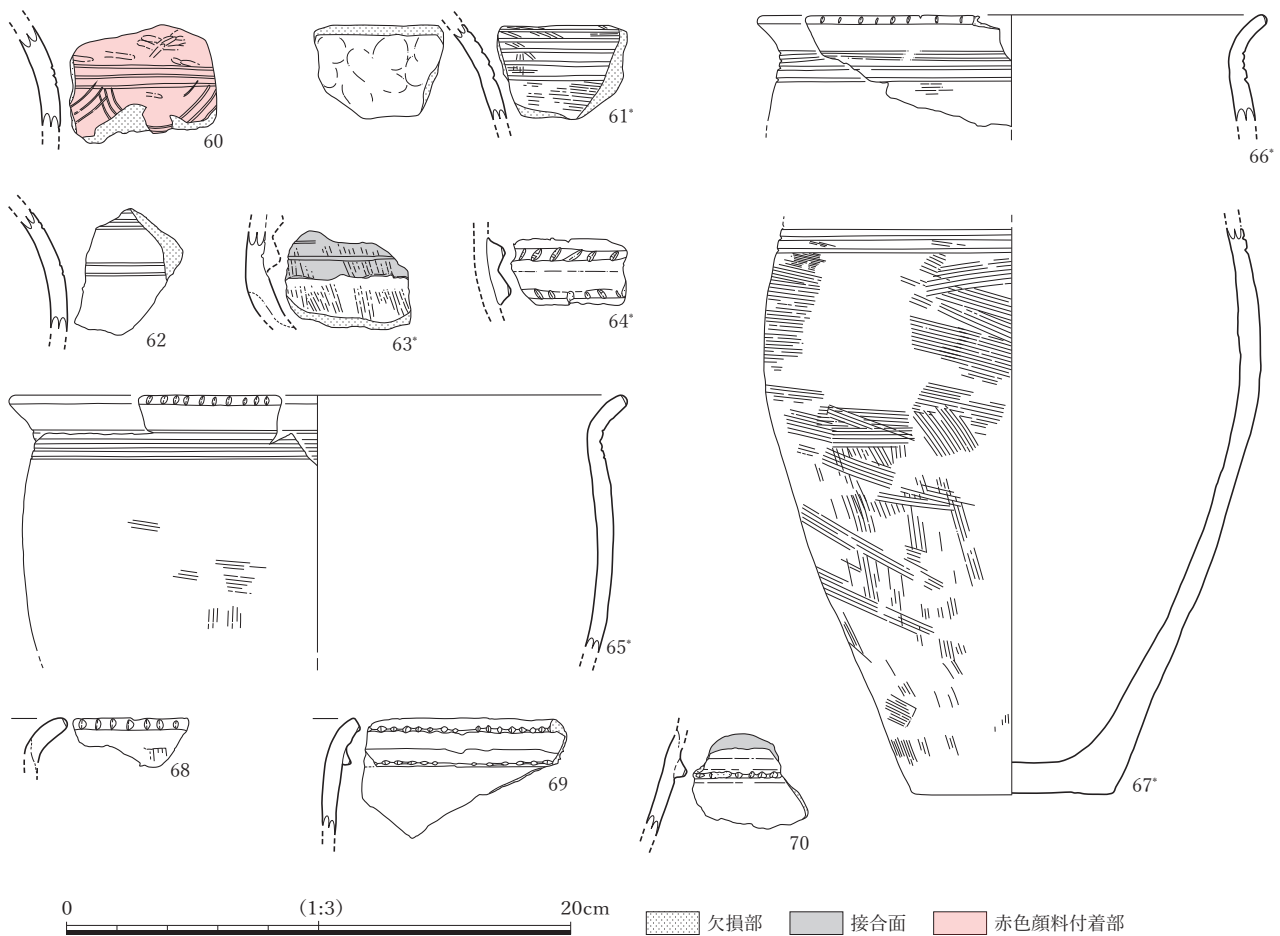
### (1) 黄褐色シルト層出土遺物（図3-28・29，図版8・9）

61・63～67・71～73・77は一か所からまとめて検出され、調査時には土器溜まりとして取り上げられた。ただし、これらの周囲に遺構は検出されておらず、ここでは包含層出土遺物として報告した。

60～64は壺胴頸部とみられる。60の上下は不明で、篋描直線文3条を施文した後、その下もしくは上に重弧文が施される。また、外面には赤色顔料が塗布される。61は篋描直線文5条を有する。62は篋描直線文を有し、胴部上半に3条以上、胴部最大径に2条が施される。63は壺頸部とみられ、貼付突帯の接合面が観察される。接合面には篋描直線文状の沈線が2条みられる。64は壺頸部付近に付された、刻目を有する2条の貼付突帯と推定される。

65～68は甕である。65・66は外反する口縁をもち口唇部全面に刻目を有する。ともに口縁部下に篋描直線文4条が施される。67は口縁部下に3条以上の篋描直線文を有する。66と67に接点はないものの、胎土や頸部径が類似する点から、同一個体の可能性がある。68は外反する口縁部をもち、口唇部全面に刻目を有する。

69・70は刻目突帯文を有する甕または深鉢と考えられる。69の口縁部は弱く外反する。口唇部は平坦で下端に刻目が施される。口縁部下には断面三角形の刻目突帯文を有する。70は胴部下半と推



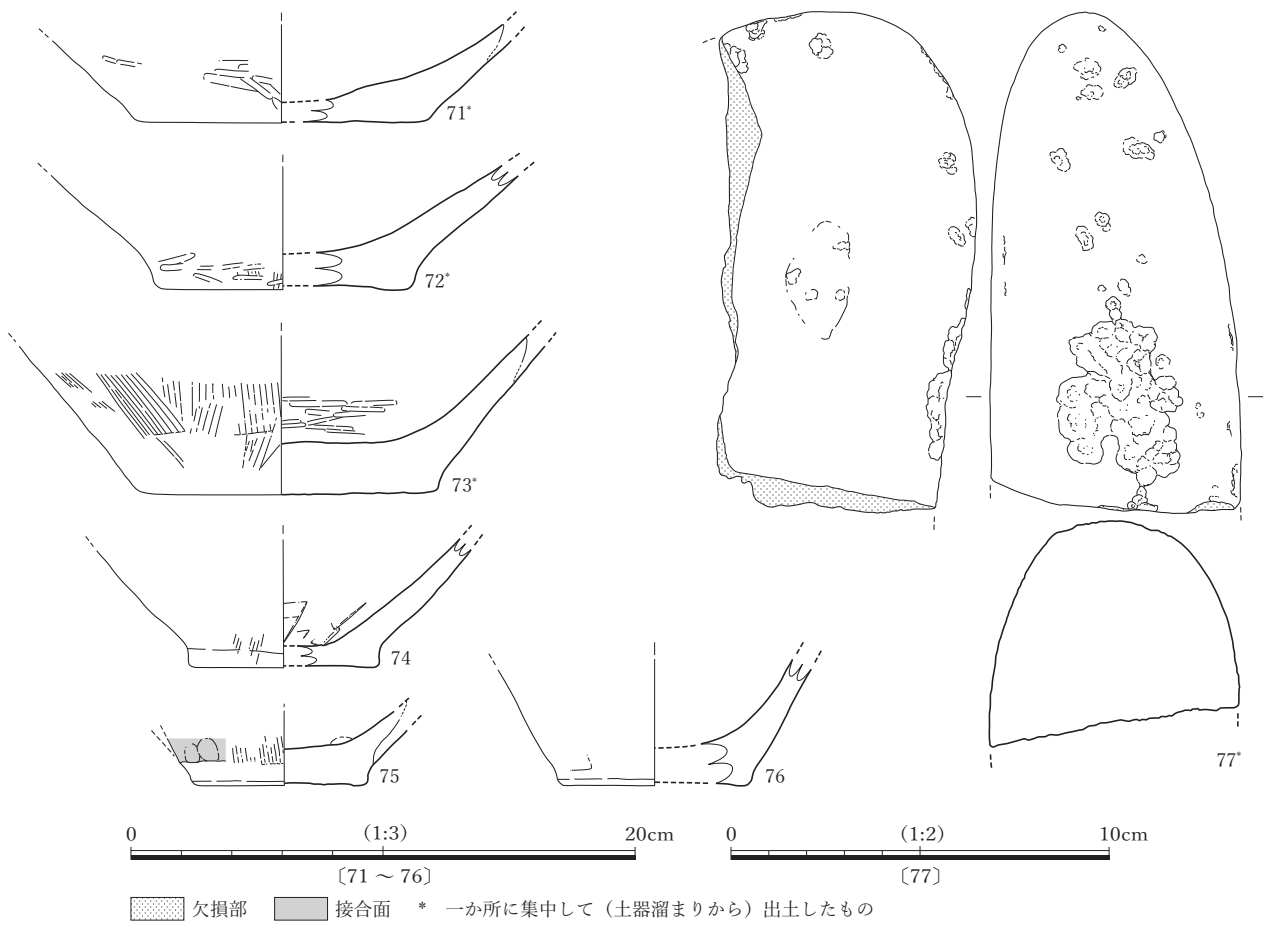
\* 一か所に集中して（土器溜まりから）出土したもの

番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面の長さ(mm)	粘土帯の幅(mm)	
60	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・壺	-	-	-	篋描直線文3条, 重弧文, 赤色顔料	ミガキ/ナデ	5YR6/6 橙/ 2.5Y8/1 灰白	-	-	-	ミガキ調整→ 施文
61	包含層・黄褐色シルト上半 (土器溜まり)	弥生土器・壺	-	-	-	篋描直線文5条	刷毛目, ナデ/ナデ, ユビオサエ	10YR6/2 灰黄褐/ 10YR6/3 にぶい黄橙	-	-	-	-
62	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・壺	-	-	-	篋描直線文3条以上, 篋描直線文2条	不明/不明	5YR6/6 橙/ 2.5Y3/2 黒褐	-	-	-	-
63	包含層・黄褐色シルト上半 (土器溜まり)	弥生土器・壺?	-	-	-	貼付突帯の接合痕(接合面に沈線)	刷毛目, 刷毛目(接合面)/ナデ	7.5YR7/6 橙・10YR6/3 にぶい黄橙/ 10YR6/2 灰黄褐	外傾	-	-	-
64	包含層・黄褐色シルト上半 (土器溜まり)	弥生土器・壺?	-	-	-	2条貼付突帯	ナデ/不明	10YR6/3 にぶい黄橙/ 7.5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-
65	包含層・黄褐色シルト上半 (土器溜まり)	弥生土器・甕	(24.2)	-	-	口唇部刻目, 篋描直線文4条	刷毛目, ナデ/ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐/ 7.5YR5/4 にぶい褐	-	-	-	スス・コゲ付着
66	包含層・黄褐色シルト上半 (土器溜まり)	弥生土器・甕	(20.0)	-	-	口唇部刻目, 篋描直線文4条	刷毛目, ナデ/ナデ	10YR4/3 にぶい黄褐/ 7.5YR5/4 にぶい褐	-	-	-	スス付着
67	包含層・黄褐色シルト上半 (土器溜まり)	弥生土器・甕	-	(8.0)	-	篋描直線文3条以上	刷毛目, ナデ/ナデ	7.5YR4/3 褐/ 7.5YR5/4 にぶい褐	-	-	-	スス・コゲ付着
68	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・甕?	-	-	-	口唇部刻目	刷毛目, ナデ/ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙/ 7.5YR6/4 にぶい橙	外傾	-	-	-
69	包含層・黄褐色シルト上半	縄文/弥生土器・深鉢/甕?	-	-	-	口唇部刻目, 刻目突帯文(口縁部下)	ナデ/ナデ	5YR6/4 にぶい橙/ 5YR6/6 橙	-	-	-	-
70	包含層・黄褐色シルト下半	縄文/弥生土器・深鉢/甕?	-	-	-	刻目突帯文(胴部)	ナデ/ナデ	5YR6/4 にぶい橙/ 5YR5/4 にぶい赤褐	外傾?	-	-	-

( ) 復元値

図3-28 包含層（黄褐色シルト層）出土遺物（1）



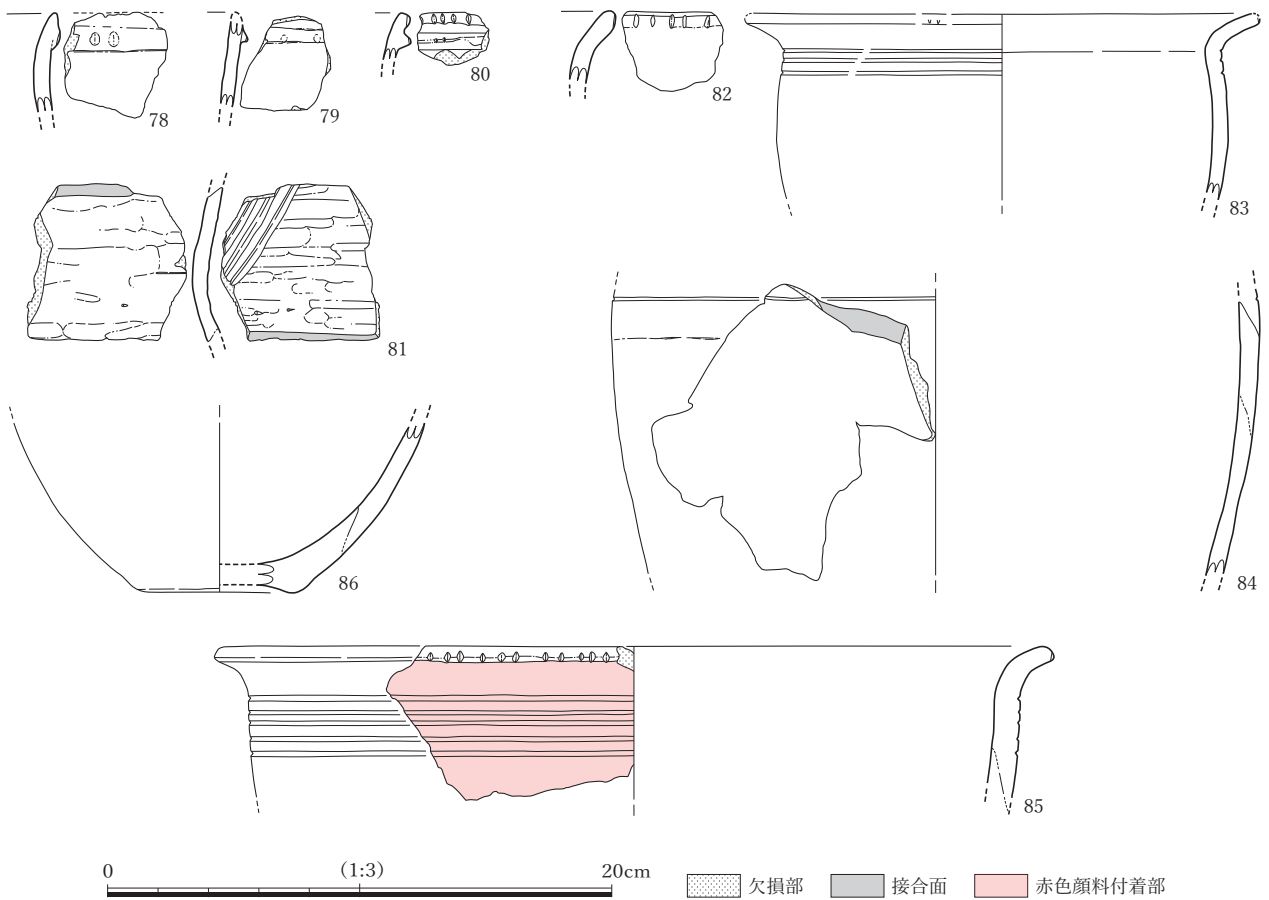


番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面の長さ(mm)	粘土帯幅(mm)	
71	包含層・黄褐色シルト上半 (土器溜まり)	弥生土器・壺?	-	(11.5)	-	-	ナデ, ミガキ/不明	7.5YR6/3 におい褐/ 10YR7/3 におい黄橙	外傾	-	-	-
72	包含層・黄褐色シルト上半 (土器溜まり)	弥生土器・壺?	-	(10.0)	-	-	刷毛目, ナデ, ミガキ/ナデ	10YR6/3 におい黄橙/ 7.5YR6/4 におい橙	-	-	-	-
73	包含層・黄褐色シルト上半 (土器溜まり)	弥生土器・壺?	-	11.8	-	-	刷毛目, ナデ/ナデ, ミガキ	10YR7/3 におい黄橙/ 10YR7/2 におい黄橙	外傾	-	-	覆い型野焼き
74	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・壺?	-	(7.5)	-	-	刷毛目, ナデ/ 板ナデ	10YR6/2 灰黄褐/ 10YR7/3 におい黄橙	-	-	-	-
75	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・甕?	-	(6.8)	-	-	刷毛目, ナデ, ユビ オサエ (接合面) / ナデ, ユビオサエ	10YR6/3 におい黄橙/ 10YR7/3 におい黄橙	外傾	27.0	-	-
76	包含層・黄褐色シルト上半	弥生土器・甕?	-	(7.4)	-	-	板ナデ, ナデ/ナデ	5YR7/6 橙/ 10YR7/4 におい黄橙	-	-	-	-

番号	遺構・層位	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材
			長さ	幅	厚さ		
77	包含層・黄褐色シルト上半 (土器溜まり)	敲石	(13.2)	(6.6)	6.5	840.0	砂岩

( ) 復元値

図 3-29 包含層（黄褐色シルト層）出土遺物（2）



番号	遺構・層位	種類・器種	法量 (cm)			文様	調整 (外/内)	色調 (外/内)	粘土帯の積み上げ方法			備考
			口径	底径	器高				接合面の傾き	接合面の長さ(mm)	粘土帯幅(mm)	
78	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	刻目突帯文(口縁部下)	ナデ/不明	5YR6/6 橙/ 2.5Y7/4 浅黄	-	-	-	-
79	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	刻目突帯文(口縁部下)	ナデ/ナデ	7.5YR6/4 におい橙/ 5YR6/6 橙	-	-	-	-
80	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	縄文/弥生土器・深鉢/甕?	-	-	-	口唇部刻目, 刻目突帯文(口縁部下)	ナデ/ナデ	7.5YR6/4 におい橙/ 5YR7/6 橙	-	-	-	-
81	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	縄文/弥生土器・深鉢	-	-	-	沈線による文様	ケズリ, ナデ/ケズリ, ナデ	10YR4/2 灰黄褐/ 2.5Y3/1 黒褐	内傾	7.0	-	-
82	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	弥生土器・甕?	-	-	-	口唇部刻目	ナデ/ナデ	7.5YR6/4 におい橙/ 5YR7/4 におい橙	-	-	-	-
83	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	弥生土器・甕	-	(20.4)	-	口唇部刻目, 篋描直線文3条	ナデ/ナデ	7.5YR6/4 におい橙/ 7.5YR7/6 橙	-	-	-	口唇部欠損
84	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	弥生土器・甕	-	-	-	篋描直線文1条以上	ナデ/ナデ	7.5YR6/6 橙/ 7.5YR6/6 橙	外傾	17.0	39.0	-
85	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	弥生土器・鉢/甕	-	(32.7)	-	口唇部刻目, 篋描直線文5条, 赤色顔料	ナデ/ナデ	5YR6/6 橙/ 5YR6/6 橙	内傾	-	-	-
86	包含層・黄褐色シルト～黒褐色シルト	弥生土器・器種不明	-	(6.5)	-	-	不明/不明	10YR6/6 明黄褐/ 10YR6/2 灰黄褐	内傾	21.0	-	-

( ) 復元値

図 3-30 包含層(黄褐色シルト層～黒褐色シルト層)出土遺物

定され、断面三角形の刻目突帯文を有する。70の上下を確定することは難しいが、図のとおりであれば、弥生時代前期の土器に普遍的にみられる、幅広粘土帯－外傾による粘土帯の積み上げ方法が採用されていたことになる。69・70は形態や胎土・色調・製作技術からみて、刻目突帯文土器そのものではなく、弥生土器化したあるいは変容した刻目突帯文土器といえる。

71～74は壺の底部、75・76は甕の底部と推定される。

77は砂岩製の敲石である。敲打痕が全体にみられるが、平面中央部と側面に敲打痕が集中し、弱く窪む部分がある。

上記の土器の時期を以下に検討する。壺60の重弧文は弥生時代のI-1・2様式、65の刻目をもつ2条貼付突帯（貼付突帯b種）はI-3・4様式、甕65・66の口縁部下の篋描直線文4条はI-2～4様式に位置づけられる（中村，2000）。全体では弥生時代のI-1～4様式の時期幅をもつといえる。

## (2) 黄褐色シルト層～黒褐色シルト層出土遺物（図3-30，図版9）

78・79は刻目突帯文を有する深鉢である。78の口縁部は弱く外反し、口唇部よりわずかに下がった位置に刻目突帯文を有する。突帯文の断面形態は低く蒲鉾形を呈する。79は直線的に立ち上がっており、口縁部または胴部屈曲部の可能性もある。突帯文の断面形態は小型の三角形である。刻目と推定される不明瞭な窪みが観察される。80は刻目突帯文を有する甕または深鉢である。口縁部は弱く外反する。口唇部は平坦に面取りされ、下端に刻目が施される。口縁部下に刻目突帯文を有し、その断面は三角形を呈する。上述の69と類似する形態をもち、刻目突帯文土器そのものではなく、弥生土器化したあるいは変容した刻目突帯文土器の可能性はある。

81は屈曲する深鉢と考えられる。外面の屈曲部より上に文様を有する。文様の全形は不明であるが、残存部には、沈線によって斜め方向の直線または曲線が並行して少なくとも3条施されている。器面調整は内外面ともに横方向の粗いナデ調整で、一部に横方向のケズリ調整が観察される。また、粘土帯の積み上げ方法は、幅狭粘土帯－内傾による。深鉢に沈線で文様が描かれた事例は、三谷遺跡の縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）の土器にも確認される。

82～84は甕である。82の口縁部は外反し、口唇部下端に刻目が施される。83の口縁部は強く外反し、口唇部に刻目を有する。口縁部下には篋描直線文3条が施される。84は胴部で、口縁部下に篋描直線文1条以上を有する。85は鉢または甕である。口縁部は外反し、口唇部下端に刻目が施される。口縁部下に篋描直線文5条を有する。外面に赤色顔料が塗布される。86は底部である。

上記の土器の時期について検討する。刻目突帯文をもつ深鉢78・79は縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）に位置づけられる。深鉢81はI-1様式以前と考えられ、縄文時代晩期に遡る可能性もある。甕82の口唇部下端の刻目はI-1様式の特徴とされる（中村，2000）。甕83の口縁部下の篋描直線文3条はI-1～4様式に継続してみられる。甕85の口唇部下端の刻目はI-1様式、口縁部下の4条以上の篋描直線文はI-2～4様式の特徴とされ（中村，2000）、両者の特徴をあわせもつ点を勘案すればI-2様式頃の所産といえようか。全体では弥生時代のI-1～2様式を中心に、最大で縄文時代晩期～弥生時代のI-4様式の時期幅が想定される。





理した。

本地点で検出された遺構の性格を検討するために、庄・蔵本遺跡第6次調査（北條編，1998）で検出された墓群との比較を行う。後者は時期的にはI-1様式を中心とし、遅くともI-2様式までにおさまる。墓は少なくとも22基が検出されており、石棺墓2基、配石（木棺）墓13基、土壙墓（木棺墓）6基、甕（土器）棺墓1基で構成される。長軸を東西方向とするものが多数を占め、東西方向に列状に並んで築造されている。本地点のSK01・SK01下層，SK02・SK02下層，SK05は、第6次調査の土壙墓や配石墓と平面形・断面形・サイズ等が類似している。加えて、I-1様式のSK02・SK02下層も第6次調査の墓と同様、長軸が東西方向である。これに対し、やや時期が下るI-2～3様式のSK01・SK01下層と、I-1～4様式のSK05は長軸が南北方向である点で異なっている点は注目される。これらは本地点の遺構が墓である可能性を示唆する。さらに、時期によって、墓の長軸方向が変化した可能性がうかがわれる。

さて、第6次調査の配石墓や土壙墓は削り抜き木棺が存在した可能性が指摘されている（北條，1998）。地域は異なるが、北部九州の江辻遺跡では墓壙内から木棺に伴う木質が検出され、配石の上に削り抜き木棺が設置されたことがわかっている（粕屋町教育委員会，2002，端野，2003）。SK02下層では、南東隅の底部からやや浮いた位置に、長さ0.3m，幅0.2mほどの塩基性片岩1点が認められる。第6次調査の配石墓では配石数が1～7程度の幅があり、配石のサイズはSK02下層と同程度のものもみられる。また、配石墓・石棺墓ともに石材はすべて塩基性片岩である点（北條編，1998）が共通する。つまり、SK02・SK02下層は配石墓の可能性もある。加えて、断面に明確な木棺の輪郭は確認できないが、U字形を呈する4層には多量の炭化物が含まれ、平面的には楕円形に広がっている。この点は、削り抜き木棺の存在を暗示する。土器は遺構北東部に集中し、4層直上の3層から出土している。木棺が存在したと仮定すれば、木棺の腐食によって棺外から土器が流れ込んだ状況が想定される。SK01下層に配石は認められないが、底部から0.1mほど上にU字形もしくは逆台形を呈する部分が認められ、埋土各層には炭化物が含まれている。これが削り抜き木棺の痕跡であれば木棺墓、木棺がない場合は土壙墓の可能性があろう。

つぎに両地点の出土遺物について検討する。第6次調査で遺物が伴うものは、土壙墓6基中3基、配石墓13基中6基、石棺墓2基中1基で、いずれも半数程度である。このうち石製品は、土壙墓3で管玉11点・サヌカイト製石鏃8点、配石墓4で管玉1点、配石墓5で管玉5点が出土しているが、これらを伴わない墓の方が多数である。本地点では管玉やサヌカイト製石鏃を伴うものはないが、SK01・SK01下層で、サヌカイト製粗製剥片石器や石庖丁の可能性のある石器が出土している。

出土土器の数量と内容について比較する。第6次調査では、土壙墓2で壺1点（細片）・底部片（甕？）1点、土壙墓5で鉢1点（残存率8割程度）、配石墓1で高坏？1点（残存率6割程度）、配石墓2で壺3点・底部1点（破片～残存率8割程度）、配石墓7で壺1点（細片）、配石墓10で壺1点（破片）・底部片1点、石棺墓2で甕1点（ほぼ完形）である。土壙墓、配石墓、石棺墓で土器を伴っており、器種は壺・甕・鉢などが存在し、特定器種に限られない。残存度は完形に近いものから細片まで含まれ、1遺構からの出土数は1～4点程度である。本地点のSK01・SK01下層では大型の破片から細片を含む壺・甕などの土器が少なくとも14点が出土している。SK02下層では完形に近いも

のから細片を含む壺・甕・鉢などの土器が少なくとも20点が出土している。土器は特定器種に限られず、完形から細片までを含む点は第6次調査と共通している。ただし、第6次調査では土器の数量が1～4点であるのに対し、本地点では図化できるものだけでも14～20点と多数の土器が伴っている点で異なっている。

上記の検討の結果、決定的な根拠に欠けるものの、SK01・SK01下層、SK02・SK02下層、SK05が土壙墓（木棺墓）や配石（木棺）墓の可能性のあることを指摘した。

## 7. ま と め

本調査の主な成果を整理すると以下のとおりである。

- ① SK02・SK02下層とSK03で縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）にまとまる土器が出土した。当該期の遺構・遺物は、三谷遺跡で検出されているが、庄・蔵本遺跡では不明瞭な状況であった。本地点で当該期の遺構・遺物の存在を確認し、当時の人々の生活痕跡を明らかにした点は成果といえる。
- ② SK02・SK02下層では遠賀川式土器のみ出土しているのに対し、SK03では突帯文土器と遠賀川式土器の両者が出土し、前者の比率が高い状況がみられた。現状で両遺構の出土土器から時間差を示す明確な型式学的な差は見いだせないが、両遺構の出土土器の違いを説明する点が課題となろう。
- ③ 縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）に位置づけられる横型流水文が描かれた壺が確認された。弥生土器に描かれた流水文としては全国的にみても最古の事例のひとつであり、注目すべき資料といえよう。
- ④ 弥生時代前期のSK01・SK01下層、SK02・SK02下層、SK05について、形態・サイズ、長軸方向、埋土の堆積状況、出土遺物の検討を通じ、土壙墓（木棺墓）や配石（木棺）墓である可能性を指摘した。
- ⑤ 縄文時代晩期末／弥生時代前期初頭（I-1様式）のSK02・SK02下層と、ほぼ同時期の第6次調査地点の墓群は、長軸が東西方向であった。これに対し、やや時期が下るI-2・3様式頃のSK01・SK01下層とI-1～4様式のSK05は、長軸が南北方向である点で異なっていた。この点は、弥生時代前期のなかでも時期により、墓の主軸方向が変化していた可能性が示唆された。

（三阪一徳）

## 註

1. 突（凸）帯文土器については基本的に「突」と表記するが、中村（2014）の土器編年により時期を示す場合は「凸」の字を用いることとした。

## 文献

深澤芳樹, 1989. 木葉紋と流水紋. 考古学研究 36 (3). 39-66.

深澤芳樹, 2000. 刻目段甕のゆくえ: 前期弥生土器における広域編年の試み. 突帯文と遠賀川(田崎博之編). 土器持寄会論文集刊行会, 愛媛. 983-999.

端野晋平, 2003. 支石墓伝播のプロセス: 韓半島南端部・北部九州を中心として. 日本考古学 16. 1-25.

- 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治, 2015. 庄・蔵本遺跡第27次調査(立体駐車場地点)の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1. 43-97.
- 北條芳隆(編), 1998. 庄・蔵本遺跡1: 徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査. 徳島大学埋蔵文化財調査室.
- 粕屋町教育委員会, 2002. 江辻遺跡第5地点.
- 勝浦康守(編), 1990. 名東遺跡発掘調査概要: 名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査. 名東遺跡発掘調査委員会, 徳島.
- 勝浦康守(編), 1997. 三谷遺跡: 徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査. 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会.
- 勝浦康守, 2000. 徳島の突帯文土器と遠賀川式土器: 三谷遺跡・名東遺跡資料の検討. 突帯文と遠賀川(田崎博之編). 土器持寄会論文集刊行会, 愛媛. 453-469.
- 近藤玲(編), 2014. 南蔵本遺跡: 県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書. 徳島県埋蔵文化財センター.
- 近藤玲, 2017. 四国東部における灌漑水田農耕の受容期の年代について: 炭素14年代法を用いた地域事例. 総研大文化科学研究13. 149-193.
- 日下正剛, 2002. 大谷焼の生産と流通. 関西近世考古学研究10. 17-34.
- 三阪一徳, 2014. 土器からみた弥生時代開始過程. 列島初期稲作の担い手は誰か(古代学協会編, 下條信行監修). すいれん舎, 東京. 125-174.
- 三阪一徳(編), 2016. 庄・蔵本遺跡2: 藤井節郎記念医科学センター新営, 附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期, 大塚講堂改修, 外来診療棟新営, 学生支援センター改修. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室.
- 長佐古真也, 1991. 瀬戸美濃産『太白焼』小考. 研究論集10. 東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター. 405-418.
- 中村豊, 2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 突帯文と遠賀川(田崎博之編). 土器持寄会論文集刊行会, 愛媛. 471-497.
- 中村豊, 2004. 弥生時代・前期末中期初頭を考える: 東四国の視点から. 古代文化56(4). 22-30.
- 中村豊, 2008. 東部瀬戸内・紀伊水道沿岸地域における凸帯文土器: 徳島地域を中心に. 古代文化60(3). 99-106.
- 中村豊, 2010. 庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報2. 11-21.
- 中村豊, 2014. 東部瀬戸内地域における縄文時代晩期後葉の歴史像. 中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像(中村豊編), 第25回中四国縄文研究会徳島大会. 1-16.
- 中村豊(編), 2017. 縄文/弥生移行期における農耕の実態解明に関する研究, 平成26~28年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書. 徳島大学大学院総合科学研究部.
- 岡田憲一, 2014. 瀬戸内海東辺における凸帯文土器と遠賀川式土器. 中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像(中村豊編), 第25回中四国縄文研究会徳島大会. 49-164.
- 佐原真, 1967. 山城における弥生文化の成立: 畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置. 史林50(5). 103-127.
- 若林邦彦, 2015. 近畿. 弥生土器: 考古調査ハンドブック12(佐藤由紀夫編). ニューサイエンス社, 東京. 209-268.